都市を考え、都市を創る情報誌 ［エフ・ユー プラス］

ISSN 1881-6541

fu+

Fukuoka Asian
Urban
Research
Center

NO. 9

都市を考え、都市を創る情報誌
エフ・ユー
プラス

fu+

Fukuoka Asian
Urban
Research
Center

NO. 9

都市を考え、都市を創る情報誌
エフ・ユー
プラス

都市を考え、都市を創る情報誌
［エフ・ユー プラス］

URC
Fukuoka Asian
Urban Research Center

都市情報誌
エフ・ユープラス第9号
2010年6月25日発行

特集

農村景観から

― 身近なタカラモノ ―

Fukuoka Asian
Urban
Research
Center

NO. 9

都市を考え、都市を創る情報誌
エフ・ユー プラス

■表紙写真:
左上:早良区石釜
右上:西区金武（写真提供:JA福岡市）
下:能古島から福岡市を望む

■裏表紙写真:
早良区脇山 田植え（写真提供:馬場雄治氏）

CONTENTS

特集 農村景観から

ページ

01 身近なタカラモノ

02 グラビア
福岡市のもうひとつの姿～農村景観～

04 農村景観向上への福岡市の取り組み
～福岡市農林水産局長 谷口芳満氏に聞く～

06 福岡市農畜産物産地マップ
福岡市直売所マップ

08 JA福岡市が取り組む農村景観づくり
～地域将来農業ビジョンとしての「今宿田んぼアートフェスタ」の企画・運営～
JA福岡市

10 市街化調整区域の研究を通して農業振興を考える
(財)福岡アジア都市研究所 研究主査 天野 宏欣

11 福岡の取り組み事例～景観保全・まちづくり・人～
○景観保全
農村部の環境向上に取り組む～不法投棄防止パトロール隊～
里山保全のための竹林整備プロジェクト（NPO法人タウンコンパス）
○まちづくり
特産品と伝統のまちづくり（早良区脇山）
山里に和をもって成すむらづくり（西区北崎校区草場地区）
産学官による農業活性化の取り組み～アグリコラボいとしま～
○人
農業後継者（福岡市青年農業者連絡会 石田寛さん）
農業体験を身近に～市民農園～
地場企業が興す農業NPO（NPO法人のこのこファーム）

15 他都市事例
～八女市上陽町・北九州市合馬（おうま）・ゲルスバッハ村（ドイツ）～
農村景観・自然環境保全再生パイロット事業
～NPOによる八女市上陽町での取り組み～
特定非営利活動法人グラウンドワーク福岡 事務局長 大谷 妙人
都市近郊農村
～都市住民とともに創る“都会のオアシス”北九州市小倉南区合馬～
ドイツ・ゲルスバッハ村の取組み～我が村には未来がある～
(財)機会振興協会経済研究所 研究員
元(財)福岡アジア都市研究所 研究主査 山本 匡毅

18 まとめ
豊かな農山漁村は国際都市の新たな条件
～福岡市の宝、山紫水明・白砂青松を守る施策～
中村学園大学 流通科学部 教授・流通科学研究所長
甲斐 諭

20 URC研究員レポート
「永遠に完成しない街づくり」
～大阪・淀屋橋地区～
九州旅客鉄道株式会社 事業開発本部企画部不動産活用課 主席
元(財)福岡アジア都市研究所 研究主査 兼子 慎一郎

22 福岡アジア都市研究所セミナー
シンポジウム
「福岡の都市型風景街道の魅力を探る」
フォーラム
「福岡市におけるアジア政策の未来」
－福岡女子×東京女子が考える「福岡でアジアを活かす・活きる道」－

24 データで見る福岡市 Vol.9
(財)福岡アジア都市研究所 研究主査 田村 一軌

26 アジア文化
日韓少女漫画事情 ❶
韓国で愛される日本の少女漫画
—1960年代から現代まで、日本漫画はいつも人気—
福岡女学院大学 人文学部現代文化学科 准教授 佐島 顕子

28 アジア太平洋都市サミット
会員都市紹介 ロシア連邦・ウラジオストク市
福岡市市民局文化振興課主査/元(財)福岡アジア都市研究所交流推進係長
アジア太平洋サミット事務局 山本 公平
「APCS通信」を通じたコミュニケーション戦略の展開
－アジア太平洋都市サミット・都市政策情報発信事業－
(財)福岡アジア都市研究所 研究主査 山下 永子

32 中国街角スケッチ
万博に沸く上海 ❶
(財)福岡アジア都市研究所 主任研究員 唐 寅

33 インフォメーション/次号予告

特集
農村景観から
—身近なタカラモノ—

戦後の日本は高度経済成長期を経て、バブル経済とその破綻を経験しながらも、経済成長を追い求め都市を発展させてきた。振り返ると私たちが忘れてきた風景がある。それは農村ではないだろうか。博多湾から市街地を望むと緑や山々といった豊かな自然を抱く福岡市にとって、農村景観は大きな魅力である。

しかし、都市のインフラ整備が優先され、農村景観への施策は後回しになってきた。近年、問題となっている耕作放棄地は、景観のみならず地域のコミュニティ機能にも大きな影を落としている。耕作放棄地へのごみ投棄や荒れた里山は象徴的事例である。

私たちは身近にあるタカラモノに気づいているだろうか。田植えの後、早苗が青々と生える棚田、季節が変わり金色に輝く稲穂とそれを縁取る彼岸花とのコントラストの美しさ。果樹や様々な野菜など作物が実る畑。これらは豊かな生産活動を担うと共に懐かしい心のふるさとであり、日本の心象風景ではないだろうか。

ところで、最近は、様々な団体や人々が、農村景観を向上させる取り組みを始めておりまちづくりへとつながってきている。

あなたも、身近にあるタカラモノについて考えてみませんか。

[グラビア] Gravure

福岡市のもうひとつの姿

～農村景観～

福岡市産の野菜が入った給食を食べる子どもたち

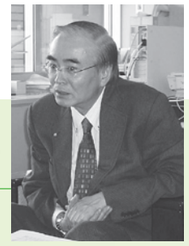
給食用玉ねぎ生産者

「海っこ山っこスクール」

写真提供（一部）：JA福岡市、福岡市教育委員会、早良区役所

農村景観向上への福岡市の取り組み

～福岡市農林水産局長 谷口芳満氏に聞く～



ー『福岡市農林業総合計画』（平成19年3月）から、福岡市の農林業の現状と課題をお話しください。また、新しい『福岡市農林業総合計画』（平成24～28年度）へ向けてどのようなお考えをお持ちでしょうか。

福岡市はこの数十年で人口が大幅に増加したため、農地や森林を宅地化してきました。農家戸数の減少は全国的な傾向ですが、平成16年と平成20年の比較では全国14％減に対し福岡市は15％減。理由のひとつは、生業として厳しいと農業に魅力を感じなくなってきているのです。そこで、戸別所得補償制度など農家戸数を減少させないための国の政策が出てきました。新しい『福岡市農林業総合計画』では、今まで中心となっていた経営の視点に、国土保全つまり日本の美しい自然を守るための景観保護も必要だという視点も追加したいですね。福岡市は緑の山々などの自然が都会の近くにあるのが大きな魅力となっています（表紙参照）。例えば市街化区域内の田んぼや畑の存在は市民が身近に自然景観を享受する憩いの場である点にも今後は着目していきたいですね。さらに農作業を行う市民を増やす方策も考えたいですね。また、地球温暖化対策として、農地・森林が持つCO_2吸収の効果についても農林業への期待は大きいと思います。福岡市域に占める農地は9％、林地は33％、合計で全体の4割強ですが、農林業従事者は多く見積もっても1万人程度。この方たちが景観も含めて農林業を守ってこられたのです。耕作放棄地問題も顕在化しており、今対策を講じなければ、土地が荒れ果てていく瀬戸際の時期に来ていると思います。農村部は散策など憩いの場として親しまれており、市民の農業への理解・応援をいただきながらこのような側面をさらに推進していく必要を感じています。

ー『福岡市 新・緑の基本計画』（平成21年5月）には、水田や畑の農地は、農業生産の場であるとともに、周辺の樹林などとともに我が国の原風景を形作ってきたとの認識があります。しかし、昨今は耕作放棄地が問題化しています。福岡市の現状をお聞かせください。

福岡市の平成20～21年度調査で、耕作放棄地は455ヘクタール存在し、その内430ヘクタールは農地として再生不能とされています。これらは、山間部や離島など後継者不足が顕著な地域の生産条件が悪い農地がほとんどです。農業の後継者が減少しているのは、他の職種との所得格差が広がり、少子高齢化の影響もあると考えられます。また、福岡市は、兼業農家が多いのが特徴で、これは農村部とオフィス街が近く通勤が便利なためですが、それが難しい周辺部から耕作放棄が起きているのが現状です。

ー後継者減少が耕作放棄に繋がっているわけですね。後継者養成は福岡市だけでは難しい面があると思われます。他団体との連携など取り組みの現在と将来展望を教えてください。

現在、後継者を確実に育てていく試みを進めています。まず第一に、担い手支援事業の「ふくおか農業塾」（写真1）があります。耕作放棄地を活用し、団塊世代等の市民に2年間野菜作り研修を実施し、直売所に卸す小規模農家の育成を目指すものです。Uターン、Iターンした団塊の世代は子どもの頃に農業体験をお持ちの方も多いので期待しています。第二に、「農業インターンシップ事業」は、農業の中核を担う認定農業者が新規就農希望者を受け入れる農家研修を支援するもので、年間30日程度行います。農業の中核を担う次世代が育って欲しいですね。第三の「耕作放棄地活用支援事業」（写真2）は、株式会社JAファーム福岡が事業主体となる市民の農業体験で、大豆・そば・高菜などを栽培、耕作放棄地の有効活用を行うものです。第四に、「耕作放棄地再生モデル事業」（写真3）があります。もーもーらんど油山牧場のヤギを耕作放棄地に放牧することにより、除草効果はもちろん、フンが肥料となり、イノシシの隠れ場をなくすことでその被害の軽減を可能とし、耕作放棄地の再生利用を図る手段とするものです。このような取り組みのPRを強化し、さらなる市民の関心や参加を促していきたいと考えています。事例として、平成20～21年度に実施した市民ボランティアによる「みのりん村」（脇山・板屋地区）（写真4）は、葉ワサビ栽培をベースに餅つきやそば打ちなどのイベントを行うものでしたが、応募が多く急遽定員を増やして開催されました。その後も参加者がサポーターとして、道路清掃の協力など地域活動に積極的に関わり続けているといった実績もあります。今後もこのような事例を増やしていけたらと期待しています。

ー福岡市の市民農園の現状についてお聞かせください。

大変人気が高いですね。市民農園は、農業継続が困難となった高齢者の農地の活用として、都市部の緑の保全にも繋げることができる形態だと思います。まず、今津と立花寺のリフレッシュ農園（市営）（写真5）と市が募集を支援している市民農園（農家が開設）が8ヶ所あります。平成19年度からの拡大推進事業で、市民農園（農家が開設）が6ヶ所増設されました。また、最近は体験農園も注目されています（P14参照）。さらに、休耕水田を活用し開設されたものに簡易型市民農園・福祉農園・タウン農園があります。その他に、志賀島貸農園（農家が開設、JA福岡市東部による運営支援）などもあります。多くの市民に楽しんでいただいておりますが、運営にあたっては駐車場や農地にかかる税金など解決すべき問題は多く、今後も国に制度の改正を訴えていく必要を感じています。

ーこれまでは、市街化区域・市街化調整区域を境として都心部・農村部に区別した施策が推進されてきましたが、環境・景観的な側面からお互いが協力するまちづくりが西区金武で始まっていますね。

地域の特性を活かし、市民が自然・里山・農業とふれあえる憩いの場を創設することを目的に「かなたけの里公園」（図）が事業化されました。地区に現存する田畑や果樹園を体験農園として活用し、地元住民が公園運営に主体的に関わりながら、豊かな自然環境の保全活動を行っています。また、特産品である野菜やぶどうの直売所を併設し市民との交流を図り、金武地区の魅力を発信し、農業に携わる方の知恵や経験を活かした里山公園を核とした農業の振興を進めていきます。

ー最後に、平成22年度の農林水産局の取り組みの抱負についてお聞かせください。

福岡の魅力は都会のすぐ近くに海・山・島といった自然を持つ美しい景観があることですね。それは農林漁業者の皆さんの長い間の努力によって守られてきたのです。その認識を新たにし、これらの美しい景観が市民の共有財産であるという共通認識をもって次世代へ継承していく方策を考えていきたいですね。平成22年度は各方面から、いろんなお知恵を拝借しながら、進めていけたらと思っています。

（聞き手：(財)福岡アジア都市研究所副理事長 松本 法雄）

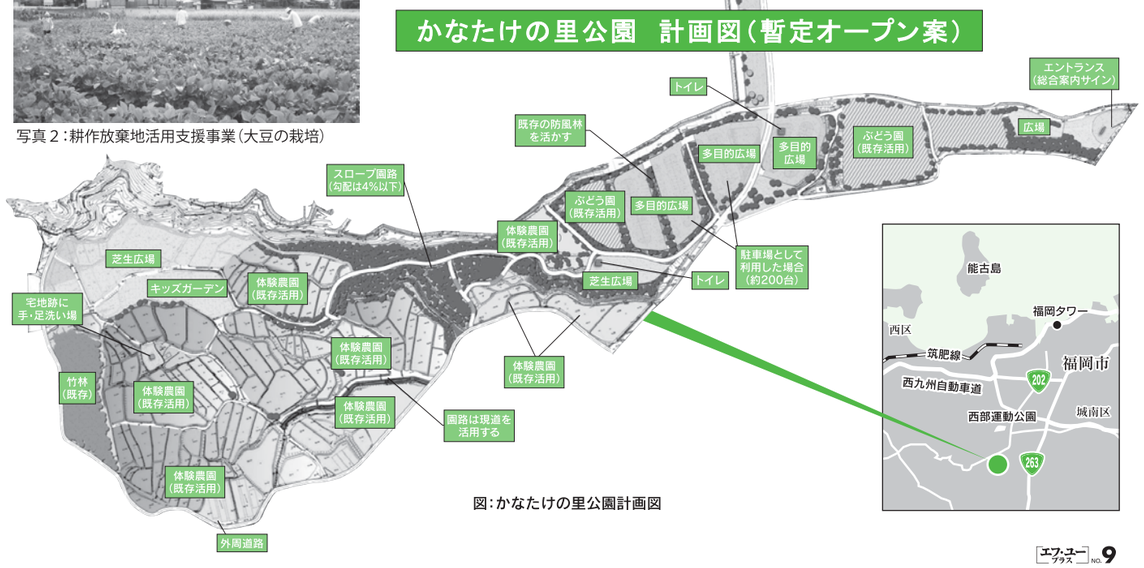
写真1：ふくおか農業塾　講義（上）、栽培実習（下）

写真3：耕作放棄地再生モデル事業
ヤギ（上）、耕作放棄地イメージ（下）

写真4：みのりん村（田植えの様子）

写真5：立花寺緑地リフレッシュ農園

写真2：耕作放棄地活用支援事業（大豆の栽培）



図：かなたけの里公園計画図

福岡市農畜産物産地マップ

私たちが食べている農畜産物がどこで作られているか、ご存じですか？

普段何気なく食卓に上がっている野菜や肉などの農畜産物。
これらの中には福岡市内で作られたものもたくさんあります。
でも、市内のどの地域で、どんなものが作られているのか、
あまり知る機会もありません。
野菜も米も肉も市内生まれだと知れば、
きっと今まで以上に美味しく感じるかも知れませんね。

●しゅんぎく

茎までやわらかく、アクも少ないので、鍋物はもちろん、サラダまで手軽においしく楽しめます。
冬場のビタミン補給には最適な緑黄色野菜です。

●博多あまおう

〈あかい・まるい・おおきい・うまい〉が特徴の「博多あまおう」。鮮やかな赤みとどっしりとした風格は、まさに“甘い王様”の名にピッタリ！
ビタミンCをはじめ、カリウムや、食物繊維も豊富で、健康と美容の強い味方です。

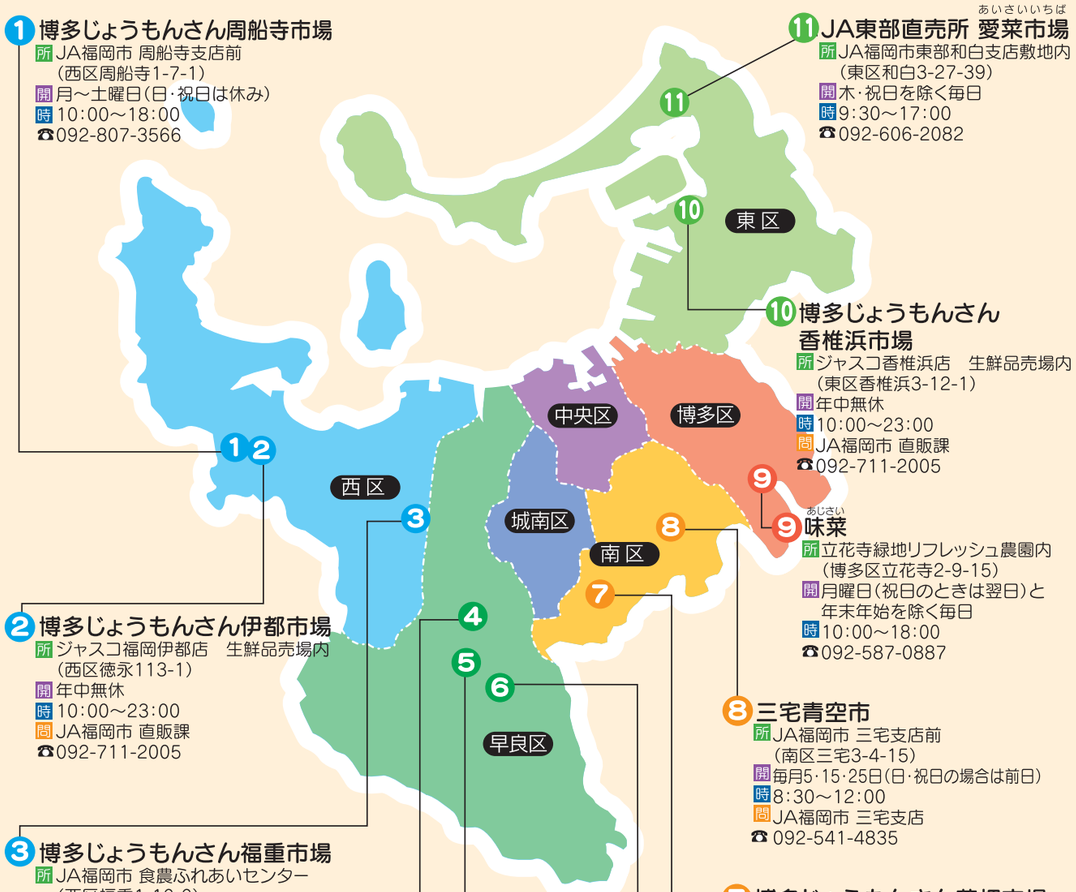
●米

福岡市内の生産者は、「安全・安心・環境にやさしい」稲作栽培に取り組み、地域の環境保全に努めています。わが街自慢の美味しいお米「博多米」をご賞味ください。

提供：福岡市農林水産局農林部農業振興課

福岡市直売所マップ

市内産のとれたて農畜産物を買うならココ！！



1 博多じょうもんさん周船寺市場
所 JA福岡市 周船寺支店前
（西区周船寺1-7-1）
開 月～土曜日（日・祝日は休み）
時 10:00～18:00
☎092-807-3566

2 博多じょうもんさん伊都市場
所 ジャスコ福岡伊都店　生鮮品売場内
（西区徳永113-1）
開 年中無休
時 10:00～23:00
問 JA福岡市 直販課
☎092-711-2005

3 博多じょうもんさん福重市場
所 JA福岡市 食農ふれあいセンター
（西区福重1-16-6）
開 月曜日を除く毎日
時 平日/10:00～18:00
日・祝日/10:00～17:00
☎092-884-3344

4 博多じょうもんさん入部市場
所 JA福岡市 入部支店となり
開（早良区東入部6-18-3）
月曜日を除く毎日
時 平日/10:00～18:00
日・祝日/10:00～17:00
☎092-872-8558

5 水源の里
所 JA福岡市 内野支店
（早良区内野8-1-2）
開 毎週日曜日
時 4～10月/6:30～11:00
11～3月/7:00～11:00
問 JA福岡市 内野支店
☎092-804-2504

6 ワッキー主基（すき）の里
所 ワッキー主基の里
（早良区大字脇山591-1）
開 月曜日とお盆・正月を除く毎日
時 火～土曜日／8:00～16:00
日曜日／7:00～16:00
☎092-803-2182
（またはJA福岡市 脇山支店☎092-804-2511）

7 博多じょうもんさん花畑市場
所 JA福岡市 花畑支店前
（南区柏原1-1-42）
開 月曜日を除く毎日
時 平日/10:00～18:00
日・祝日/10:00～17:00
☎092-565-2900

8 三宅青空市
所 JA福岡市 三宅支店前
（南区三宅3-4-15）
開 毎月5・15・25日（日・祝日の場合は前日）
時 8:30～12:00
問 JA福岡市 三宅支店
☎ 092-541-4835

9 味菜（あじさい）
所 立花寺緑地リフレッシュ農園内
（博多区立花寺2-9-15）
開 月曜日（祝日のときは翌日）と
年末年始を除く毎日
時 10:00～18:00
☎092-587-0887

10 博多じょうもんさん香椎浜市場
所 ジャスコ香椎浜店　生鮮品売場内
（東区香椎浜3-12-1）
開 年中無休
時 10:00～23:00
問 JA福岡市 直販課
☎092-711-2005

11 JA東部直売所 愛菜（あいさい）市場
所 JA福岡市東部和白支店敷地内
（東区和白3-27-39）
開 木・祝日を除く毎日
時 9:30～17:00
☎092-606-2082

※季節や生産状況等により、営業時間が変更される場合があります。

提供：福岡市農林水産局農林部農業振興課

JA福岡市では、管内各地域で豊かな自然と農業を次代に残していく活動を展開している。昔から農家を中心として行ってきた協同活動に、地域将来農業ビジョンの実践という要素が加わったことにより、その活動はさらに活発になり、輝きを増している。まさに失われつつある「昔ながらの田園風景」と「人と人とのつながり」を体現する取組みである。
昔ながらの田園風景、地域の伝統を活かした地域活性化に取り組んでいる「今宿地区」。住民と一緒になって今宿の魅力発信に努めている。風光明媚な自然環境を後世に伝えていくためにも、今後も地域おこしに取り組んでいく。

JA福岡市が取り組む農村景観づくり

～地域将来農業ビジョンとしての「今宿田んぼアートフェスタ」の企画・運営～

JA福岡市

地域と連携した彼岸花の郷づくりを開始

福岡市西区今宿で、『彼岸花の郷づくり運動』が始まったのは、2006（平成18）年。当時、今宿支店では、今宿地区の今後の農業の在り方を考え、地域の方たちと一緒に取り組む地域おこしを検討していた。そこで企画したのが、彼岸花の植え付けを地域住民と行う『彼岸花の郷づくり』。彼岸花の定植は、「美しい景観を保ちながら地盤強化を図ることができる」「彼岸の先祖供養にもつながる」「畦の草を刈る時の目安になる」「根は薬用として活用できる」など、いいことづくし。人と農地にやさしい彼岸花を増やすため、毎年3,000～4,000個の球根を定植することになった。

彼岸花の球根を植える

運動をベースに新たな地域おこしを展開

1年目は、組合員と支店職員が農家の方たちと結束し、地域住民に呼びかけて上ノ原地区を中心に彼岸花の球根を定植。2年目、3年目と重ねるにつれて球根の数が増え、定植範囲も拡大していった。4年目を迎えた2009（平成21）年は、9,000個を超える球根を沿道や畦に定植した。

今宿地区の周辺は、姪浜や九大学研都市など、マンション建設や九大移転による土地区画整理など、都市開発が進んでいる。

そんな中、昔ながらの田園風景を保ち続けている今宿地区の魅力を地域内外にアピールしようと、2008（平成20）年から彼岸花の咲く時期に合わせて「今宿田んぼアートフェスタ」の開催に踏み切った。当初は農家、地域住民、JAが中心だった活動も、地元商工業協同組合やJR九州など様々な団体が参画するようになり、地域おこしの輪はどんどん広がっている。農家やJAなどの農業者、商工業者、JR九州などで構成する実行委員会が中心となって、フェスタの企画・運営に取り組んでいる。

稲穂で文字をかたどる「田んぼアート」にチャレンジ

田んぼアートのデザイン・測量を担当するのは、今宿の若手農家を中心に構成する青年部。パソコンを使ってデザインを決め、田んぼの実寸を測量してから苗の数を割り出すなど、前準備にかなりの時間を要した。田植えには、地元農家約50人と青年部、さらに2009（平成21）年からは中村学園女子高等学校の生徒も参加し、朝から夕方までたっぷり1日かけ約5,000㎡の田んぼに一株ずつ丁寧に手で苗を植えた。田んぼアート1回目の2008（平成20）年度は「I♡今宿」、2009（平成21）年度は「好いとう♡今宿」の文字をデザインに決定。

稲の栽培管理も地元農家で行い、ジャンボタニシに苗を食べられては補植し、イノシシに荒らされては電気柵を張って、稲穂の補修に励んだ。9月上旬には草刈も終了。たくさんの人たちの熱意と労力が集結し、待望の田んぼアートが完成した。

「田んぼアート」田植え

「田んぼアート」田植え参加者の皆さん

「田んぼアート」完成

『今宿田んぼアートフェスタ』

会場は、上ノ原地区にある福岡県警の射撃場下。高台から見下ろすと、田んぼアートが一望できる場所だ。『駅長おすすめのJR九州ウォークキング』の参加者や地元の方たち約2,000人が訪れた。フェスタでは、今宿の魅力をより多くの方に知っていただくため、田んぼアートの場所をJR九州のウォーキングコースに設定したり、環境に配慮したJA福岡市のお米「赤とんぼ米」で作るおにぎりの振る舞いや、農産物直売所「博多じょうもんさん」ブランドの野菜直売、今宿の商工業PRなど、来場者からは好評を得ている。今宿の食と農を中心とした「食育○×クイズ」や、「今宿玄洋子ども太鼓」と福岡市西消防団今宿分団員「今宿纏太鼓」、「今宿青木獅子舞」など、地域の伝統芸能の演技に会場は沸いた。

駅長おすすめのJR九州ウォーキング
図版提供：JR九州

今宿玄洋子ども太鼓

今宿田んぼアートフェスタ

今後も進化しつづける彼岸花の郷「今宿」

今宿商工業協同組合の協力により、多くの地域の方と親交を深めることができた「今宿田んぼアートフェスタ」。2006（平成18）年から「彼岸花の郷づくり」を地道に広めてきた活動は、ようやく地域を巻き込んだ大きな運動へと変わりつつある。今宿の地域おこしは、毎年進化している。今宿地区全体が毎秋、彼岸花で彩られた美しい田園風景が見られる日も遠くはないだろう。

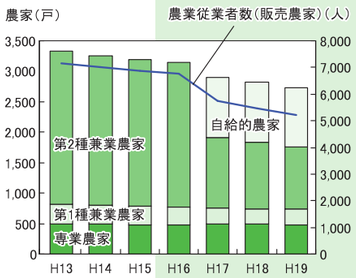
(財)福岡アジア都市研究所は、平成20～21年度に『市街化調整区域の施策に関する研究』を実施しました。この研究は、市街化調整区域の土地利用施策の事例比較を行い、高齢者の生活実態、農村集落の状況、耕作放棄地や交通問題等、幅広い視点から現状と課題を考察し、今後の市街化調整区域に対する施策を提言したものです。農業振興という観点に絞り、本稿で今後の市街化調整区域の活性方策を整理しました。

市街化調整区域の研究を通して農業振興を考える

(財)福岡アジア都市研究所 研究主査　天野 宏欣

農業の担い手が減少し続けている

平成6年度に約4,400戸あった福岡市の農家の戸数は、平成19年度には3,148戸と約3割も減少しました。農業の従事者も減少の一途をたどり、平成19年度の販売農家の農業従業者数は約5,200人にまで減少しました。



注：H17以降、専業兼業別集計は販売農家（30アール以上又は年間の農産物販売金額が50万円以上の農家）のみになったため、自給的農家区分と表記

図1：福岡市の農家戸数と農業従業者数の推移
出所：福岡市農林水産統計書

さらに深刻なのは、農業従事者の高齢化です。農業就業者の年齢構造を見ると、平成17年調査時点で、販売農家の6割以上が60歳以上の高齢者です。今後10年程度で就農人口が半減する傾向が想定される年齢構造から考えると、新規の農業就業者を大幅に増やす施策や、少ない農業人口でも経営可能な大幅な農業効率改善施策を打たない限り、福岡市の農業の存続は大きな危機に直面することになります。

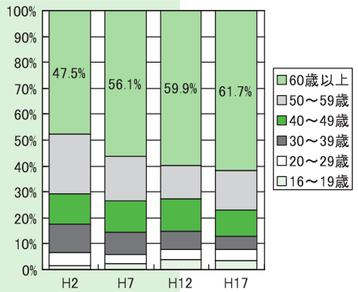


図2：福岡市の農業従事者の年齢構成比推移
出所：農林業センサス

農業の担い手を受け止める核集落の形成を

このような危機的状況に対し、福岡市は「福岡の魅力と環境を支える農林水産業を振興する」ことを目標に、農林水産業の振興、農林水産業の機能強化、農山漁村地域の振興、卸売市場の機能強化等の政策を実施しています。福岡市が実施している各種農業振興施策が徒労に終わらないためにも、農業を維持・発展できる、集落営農に適した核地区を計画し、そこに新たな農業人口や企業を定着させ、また、農業従業者の通勤を可能にするよう誘導することが、今後の市街化調整区域の土地利用を考える上重要になるでしょう。

研究では福岡市の市街化調整区域を就業構造、交通、耕作放棄地、人口構成の指標からクラスタリングを行い、4種類のクラスター（図3参照）から、核となる持続可能な農漁業集落、良好な郊外住宅地を兼ねた農林漁業の通勤適地に向けた集約化施策を提案しました。

具体的には、農業の担い手に供する住宅や商業施設を地区計画に盛り込むこと、核集落以外での開発に対する強い規制、居住者の集約化を促す税制と支援金、土地の集約化を促す資産の等価交換、行政による新たな担い手への土地の確保と融通、市街化区域内の開発規制緩和とセットにした民間の耕作放棄地整備、バス事業者・鉄道事業者と行政とのパートナーシップ等のインセンティブ施策や規制措置が考えられます。

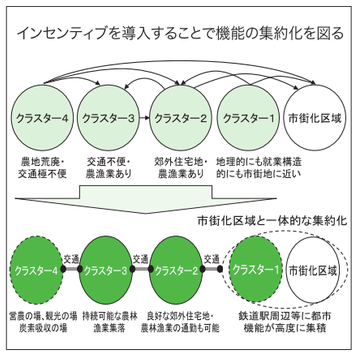


図3：4種のクラスターによる集約化イメージ

福岡の取り組み事例

～景観保全・まちづくり・人～

福岡市およびその近郊の農村地帯では様々な取り組みが行われている。景観を保全するものからコミュニティづくりまで。そこには多様な主体の参加がある。それらを3つの切り口から8つの事例に分けて紹介する。

●景観保全

高齢化、後継者不足などによる農村のコミュニティ機能低下により耕作放棄地の拡大や里山の荒廃など景観の低下が目立つ。その対策を追ってみよう。

農村部の環境向上に取り組む
～不法投棄防止パトロール隊～

福岡市環境局は、2005（平成17）年度に地域住民団体による不法投棄防止活動に支援を行う「福岡市不法投棄防止推進費交付要綱」を制定し、現在、市内15校区14団体を承認している。当該団体では、不法投棄防止パトロールや不法投棄されたごみの回収を行っている。行政だけでは細かい対応が難しいこの問題に地域住民が熱心に取り組み、地域の環境向上に貢献している。

早良区（脇山校区、内野・曲渕校区、入部校区）の活動を紹介すると、制度創設当初から不法投棄防止パトロール隊を結成し、不法投棄防止に積極的に取り組んでいる。早良区役所によると、上記校区が位置する山間部では不法投棄が絶えず、環境悪化が懸念されている。そこで脇山校区では、地元役員が駐在所、区役所等と共働し、月1回「不法投棄監視パトロール中」のマグネットシールを貼付した車両で校区を巡回。不法投棄防止看板の設置や投棄者の調査、不法投棄ごみの処理を行っている。また、内野・曲渕校区、入部校区では、毎月1回の地元役員によるパトロールに加え、年1～2回は営林署などの参加を得て、校区をあげた活動が展開されている。

不法投棄パトロール中（脇山校区）

不法投棄物の回収（内野・曲渕校区）

不法投棄されたごみ（入部校区）

里山保全のための竹林整備プロジェクト
（NPO法人タウンコンパス）

近年、里山では竹林の過密により生態系のバランスを失うなど問題が表面化してきているが、適切な対応がなされているとはいい難い。そこで、NPO法人タウンコンパス（福岡市博多区）は社会実験「里山保全のための竹林整備プロジェクト」を2005（平成17）年より行っている。「里山にタケノコ掘りに出かけ、その荒廃に驚きました。整備のための人手不足やコミュニティ機能の低下を感じたのがきっかけです」と理事の東島隆三さん。

このプロジェクトは、佐賀県武雄市・福岡市・志摩町で地域住民・学生（九州大学・福岡大学）との協働による竹林・竹やぶの手入れおよび土木技術者のCPD（継続教育）プログラムとしての活用からなっている。

さらに、伐採した竹が有効活用され、将来的には経済効果を生み出す期待も大きい。具体的には、竹綿・竹チップに加工し、堆肥化・土壌改良剤・マルチ材として農業利用、また雑草防止（庭・植樹帯の根元への敷設）、温暖

化抑制（駐車場・公園遊歩道、バイオ燃料）、竹チップを利用した生ゴミ処理といった生活面が挙げられる。

「我々NPOが入ることにより地域の方が竹林整備のノウハウを得、ゆくゆくは地域主導の活動となる手助けになればと考えています」（東島さん）。

竹林伐採の様子（佐賀県武雄市）

竹チップ製造中

●まちづくり

さらに、特色のあるまちづくりが行われている。課題解決のための試み、地の利を活かした各セクターとの連携など様々だ。

特産品と伝統のまちづくり（早良区脇山）

中山間地・脇山は伝統的な米どころである。1928（昭和3）年11月、今上（昭和）天皇の即位の大礼の際、天皇に供せられる「昭代」と命名された新穀を奉納する大祭が行われた。古来より京都以東以北の「悠紀（ゆき）」、以南以西の「主基（すき）」の各地方から新穀が奉納される慣例。早良郡脇山村（当時）が「主基」に決定した。水がきれいで収穫が早く、風俗人情が純朴という理由である。

現在は、高齢化および後継者不足の課題を解消すべく、独自の試みで地域活性化を目指す。2002（平成14）年4月に、「ワッキー主基の里」がオープン。地元の特産品の直売所であり、100人余りの生産者(農家)で運営。また、脇山ならではの産物、米・緑茶の生産・販売は特徴的だ。まず、高品質で名高い脇山米をブランド化し、販売開始。田植え時期には、主基祭田で地元小学校と自治協議会による「お田植え舞」も披露され、伝統承継が行われている。女子児童が主だったが、興味を引かれ参加する男子児童も。さらに、京都の宇治茶より古い歴史を持つ脇山茶の復活。荒廃していた茶園が、2003（平成15）年に早良区役所・振興協議会・青年部などのボランティアで生産を再開し、地域の特産品となっている。「地域振興の新しい組織を立ち上げ、住民の農業への関心を高める活動を継続したい」とJA福岡信連退職後、さらに地域活動に力を入れる馬場雄治さん（脇山あぐり倶楽部代表）。

1928（昭和3）年の田植え祭り。
早乙女の舞（「ワッキー主基の里」HPより）

茶摘みの様子

山里に和をもって成すむらづくり（西区北崎校区草場地区）

日本の原風景を醸し出す、水田やビニールハウスが並ぶ緑豊かな一帯。第一次産業就業率が58.5%（福岡市第一位、（財）福岡アジア都市研究所調べ）、専業の大規模・中核農家を含む、福岡市では非常に珍しい純農業集落の一つだ。この地区のまちづくりについて、2010（平成22）年3月まで自治会長を務めた楢崎浅実さんに伺った。

約30戸の全世帯が何らかの形で農家であり、大根やスイカ・花・ほおずきなどを栽培。人口は約140人、平均世帯員は4～5人、全世帯の約半分が多世代同居である。また、20代、30代の女性が多数で、嫁いで来た女性も数多く、第三次ベビーブームが起こっているのが特徴である。

ここでは、農業生産を基本とした伝統的な農村システムが維持されている。地域の組織が実体として機能しているのである。集落組織としては、自治組織と葬式組があり、この自治組織と農事組織が一体である。生産組合は、集落の組合長の下、東・中・西の各組に連絡員を配し、区長が水理組合の組合長を兼任している。役員は数年ごとに交代、また住民が特別に「まちづくり」を意識せず、日頃からそれぞれの役割を自分の出来る範囲で行っている。

また、皆がよりあい助け合う風習が培われており、お盆の「盆綱引き」や「おこもり」などの伝統行事、町内の体育祭も盛ん。青年部では、年2回の柑子岳（こうじだけ）の切払い活動なども。さらに、集落の目立つところに耕作放棄地が1ヶ所でもあると全体がすさんで見えるため、協力して農地を守る取り組みを行う。それがまちづくりにつながっているようだ

草場

産学官による農業活性化の取り組み ～アグリコラボいとしま～

文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム採択事業（平成19～21年度）の九州大学「糸島現代GP」は、「地域環境・農業活用による大学教育の活性化」をテーマに様々な取り組みを展開。全学低年次教養教育科目として、「糸島農村留学」「糸島で学ぶ“命のあり方・尊さと食の連関”」など8科目が開講された。受講生からは、「農業だけでなく環境について、人間が生きるということについて思索した」と感動が寄せられた。また、九州大学と糸島地域が有機的に連携し地域の豊かな資源（農業・食・環境など）を活用した教育研究を行ったことにより、これまで以上に産学官の交流が深まった。

その展開として、「糸島農業産学官連携推進協議会（通称：アグリコラボいとしま）」が3月29日に発会。糸島地域の農業者・JA糸島（「産」）、九州大学農学研究院（「学」）、福岡県農林事務所福岡普及指導センター・糸島市（「官」）の産学官連携による糸島地域の農業活性化を目指すが、農業者が「産」として参加しているのは全国的にも例がない。協議会の活動は、①ワークショップ等の開催②課題対応型研究の提案・実施・協力③先進的技術創生研究の提案・実施・協力④地域ニーズ、研究成果等に関するデータベースの構築と活用⑤活動内容の発信。今後の、各セクターの連携への期待は高い。

「糸島農村留学」牧場での実習

アグリコラボいとしま発会式

●人

農村には、従来から農業を営む人以外にも様々な人が参入している。新規就農の若者、市民農園の関係者、農業NPOなど。その現状と声を聞いてみよう。

農業後継者（福岡市青年農業者連絡会 石田 寛さん）

福岡市西区今津でイチゴ生産者として働く石田寛さん。サラリーマン家庭に育ち、営業職経験後に現在の仕事についたのは2006(平成18)年4月のこと。福岡農業大学校を経て、両親と2反のビニールハウスで「あまおう」を栽培、福岡だけでなく京都や沖縄へも出荷している。「早朝の収穫や丁寧な作業が必要なパック詰めなど根気がいりますが、味を落とさないため温度調整の工夫や、不耕起など新しい技術を試すのも面白い。美味しいという声が聞けるのはうれしいですね」

石田さんが平成21年度に会長を務めた福岡市青年農業者連絡会は、1976(昭和51)年設立。約40名の会員は、20～40代の若手農業者で他業種を経験後に就農した人も多い。定期的に意見交換を行う。今後はITを使った消費者への情報伝達も行いたいと意欲的だ。天神地区での福岡市農産物の消費者へのアピール行動、栄養士と共同で開発したレシピの直売所での配布なども活動の一環だ。「福岡市では、トマト・ネギ・ブドウなど多種生産されています。ぜひ市内産をお試しください」

石田さん

農業体験を身近に
～市民農園～

農業を体験する方法として市民農園が人気だ。1977（昭和52）年に開設され、市民農園組合（各農家）が管理運営を行うもので、市内には8ヶ所ある。利用者は15㎡（3m×5m）の1区画に自由に作物を栽培。また、体験農園という新たな方法も注目を浴びている。市では2009(平成21)年4月から2農園が開設され、農家（園主）の指導のもと年間の作付け計画・栽培計画に従い種まきから収穫までを行うもの。自由に好きな作物の栽培は出来ないが、年間20～30種の収穫が可能。

西部萩ケ丘市民農園(福岡市西区戸切)は110区画を有する。運営・管理を行う原夫妻は「近年は『市政だより』を見て応募した幅広い年齢層の方が利用されています。屋根つきの作業スペースを作ったので、顔なじみの方と雑談するのが楽しいですね。マナーを守って農作業を」とのこと。利用者は、野菜やハーブなどの栽培を行っている。「虫や草に苦労しますが、安全な農薬の使い方や頻繁な草取りなどの工夫も楽しいので続いています」「定年退職後、時間ができたので農作業を行うことができてうれしい」などの声が聞かれた。

市民農園は、毎年8月1日の『市政だより』で利用者の募集を行っている（区画に空きができた場合のみ）。興味のある方は、ぜひお問い合わせを。
（担当：福岡市農林水産局農業政策課 TEL：(092)711-4841）

西部萩ケ丘市民農園の皆さん
（右から2人目が運営・管理の原正行さん）

西部萩ケ丘農園

地場企業が興す農業NPO
（NPO法人のこのこファーム）

福岡市西区姪浜から船で10分、玄界灘に囲まれた緑豊かな能古島。ここは、福岡市に本社を構える株式会社ピエトロの代表取締役社長・村田邦彦さんが理事長を務めるNPO法人のこのこファームの活動の舞台である。2006（平成18）年7月に設立し、地元企業を中心とした法人会員16社、個人会員23名を抱える。

主な活動は、月2回（土曜日）の農業体験や不定期開催で食育を勉強する野菜塾。また、会員が自分の好きな野菜を栽培する市民農園も開放している。2～3歳から70歳代まで幅広い会員のもと、近年希薄になった伝統行事（もちつきなど）も行う。有機堆肥づくりや浜辺のごみ広いなどエコロジーを意識した活動も。また、能古島観光協会の出店協力を得、「NPO菜の花まつり」開催、「福岡環境映画祭」主催など農業を超えた事業も展開しつつある。

理事長の村田さんは「私自身、週一度歴史と自然に恵まれた能古島で過ごす時間は貴重なものになっています。ぜひ、農業の楽しさを体験していただきたい。会員以外の方も大歓迎です」とおっしゃった。

農体験イベントで挨拶する村田理事長

農体験イベント

福岡環境映画祭2008in能古島

他都市事例

内外3つの農村をご紹介。農村景観の向上だけではなく、コミュニティ機能も強化したまちづくりの事例に学ぼう。

～八女市上陽町・北九州市合馬（おうま）・ゲルスバッハ村（ドイツ）～

農村景観・自然環境保全再生パイロット事業
～NPOによる八女市上陽町での取り組み～

特定非営利活動法人グラウンドワーク福岡 事務局長 大谷 妙人

はじめに

特定非営利活動法人グラウンドワーク福岡は、福岡市博多区美野島の事務局を拠点に県内全域での環境改善活動に取り組んでいる。

平成7年に八女市でまちづくり活動に関わったことをきっかけに、矢部川流域での活動が始まり、平成19年度からは福岡県南部の八女市上陽町にある「ほたると石橋の館」「ふるさとわらべ館本館」他3施設の指定管理者として管理運営を受託し、同時に上陽地区における地域づくり活動が始まった。

八女市上陽町は、福岡市の南約65kmに位置し、山林に囲まれた町を矢部川の支流星野川が東西に流れる中山間地である。ほたるの群生地と石橋が数多く存在する風光明媚な場所として知られる一方、狭小な棚田での農業は平野部の大規模農業に比べると生産効率が低いことから農業経営が難しく、またかつての主要産業であった林業の衰退等の理由から、若者の転出と高齢化、耕作放棄地の出現、里山の荒廃、それらに起因する農村景観の悪化に悩まされていた。

ウェルッシュカントリーガーデンの花植え作業。
地元住民・グラウンドワーク福岡会員・留学生など様々な人が関わる

ウェルッシュカントリーガーデンづくり

農林水産省「農村景観・自然環境保全再生パイロット事業」を受け、上陽町ではウェルッシュカントリーガーデン整備に取り組んだ。ウェルッシュカントリーガーデンとは、ウェールズ地方の家庭に多く見られた野菜・花・ハーブの混植を基とした景観性と実用性を兼ね備えた庭造りのことで、英国・ウェールズのグラウンドワークトラストと当法人の17年に渡る交流を上陽町での地域づくりに活かそうと生まれたアイディアであった。

町内の別の地区では、耕作放棄地活用を目的に大根・白菜・高菜・ジャガイモを栽培し、収穫後はたくあん漬け、白菜漬け、キムチ、高菜漬け等へ加工を行った。作物の選定にあたっては、①一斉に収穫できる②加工・保存ができる③各プロセスに都市住民も参加できるという点を重視しこれらの作物を「都市交流作物」と名づけた。

このように都市と農村の交流を行いながら耕作放棄地活用もでき、さらには景観保全にもつながるという一石三鳥のプロジェクトからその後、ひまわりによる景観づくりと種から油を採って特産品づくりを行う「ひまわりプロジェクト」、サツマイモ栽培による「焼酎作りプロジェクト」など次々にアイディアが生まれ、順次取り組みが始まっている。

収穫した大根を使って漬け物づくり。地元住民が作り方を指導

今後の活動

今日、従来我が国にどこにでも存在していた「結い」「もやい」「手間がえ」「苦役」などの協働労働、相互扶助制度が破たんし、中山間地での暮らしをますます困難にしている。

そこで我々は英国や米国などで実施されている「タイムバンキング制度」（1時間のボランティア活動に対し1クレジットが与えられ、それを他の地域サービスをうける際に使用できる制度）を新たな相互扶助制度として位置付け、上陽町で導入に向けての試みを始めている。

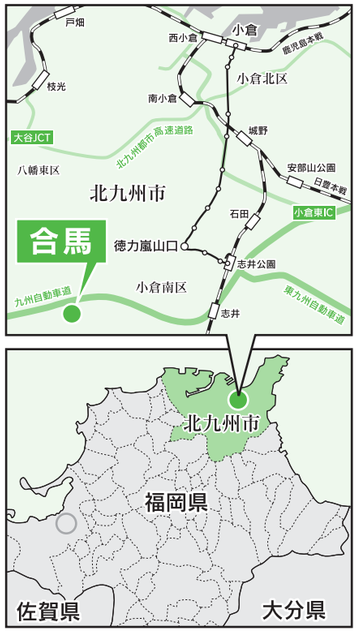
このような活動は地域住民だけでは成しえない。ましてや、都市住民、行政、NPOの単独だけでは決して成しえない。それぞれが知恵と力を出し合い、話し合いと作業を重ね、少しずつ形になっていくもので、試行錯誤を続ける毎日である。そう、私たちの目的「誰もが幸せに暮らしていける22世紀の地域社会づくり」の実現に向かって。

都市近郊農村
～都市住民とともに創る“都会のオアシス”北九州市小倉南区合馬～

地理的条件とライフスタイル

北九州市営モノレール徳力嵐山口駅から車で10～15分、小倉駅までは30分の合馬集落。都市の農山村ともいえるこの地域は、地理的条件を最大限に活用し集落を活性化している。とりわけ有名なのは、江戸時代後期から生産し、全国的な知名度を誇る「合馬たけのこ」である。

都市近郊の農家のライフスタイルに適合した暮らしの中に、農業を組み込み無理なく集落を維持すると同時に、農家の新しい展開（直売所など）を可能にし、非常に高い家計（非農業所得＋農業所得）を上げている。2009(平成21)年データでは、世帯数220戸（農家数122戸）、総人口762人、竹林面積300ヘクタール。就業人口は、農業者より非農業的就業（製造業・サービス業・金融業など）が上回り、若者ほど非農業者数が多い。若いうちは都心部で働き、中年からは勤めと田んぼを守り、定年退職後は本格的なタケノコ生産に入る。女性は家の畑で野菜を作り、農産物直売所で働き収入を得ている。



合馬校区まちづくり協議会

2006(平成18)年1月、市民憲章に基づき合馬小学校区の7集落で合馬校区まちづくり協議会が設立された。5部会（地域振興部会・安心安全部会・社会福祉部会・生涯学習推進部会・竹林公園運営部会）を有する。1996(平成8)年に発足した合馬むらづくり協議会を母体とし、「合馬を活力ある第6次産業の場に」と「住む人にも来る人にも合馬を憩いの場に」をスローガンに活動を進めている。また、2004（平成16）年以降、北九州市住宅供給公社による賃貸住宅「ルワージュ合馬」が竣工、外からの定住により集落が変化している。

地域振興部会の活動は次の3つである。①農村の維持発展：「合馬たけのこ」のブランド化や新規品目への栽培および地域素材を活用した加工品を開発し、それらを販売する農産物直売所を開設し地元農家の所得確保。②都市住民にとっての憩いの場づくり：自然や市無形文化財などの地域観光資源の整備およびイベントを通じ、合馬を訪れる都市住民に憩いの場を提供。例えば、三岳梅林、校区内の5つの川すべてに生息するホタル、能行口説、合馬小学校児童が継承する「合馬神楽」やイベント「たけのこまつり」「竹の里フェスタ」などがある。③都市住民が積極参加する「むらづくり」への発展：放置竹林を広葉樹林に変える「合馬復元の森」ボランティアやNPO農林業サポート組織「農甦の会」が発足。前者は毎年1回の開催で、今年5回目を数える。豊かな海を支えるためには、森林から河川を経由し海に注がれる良質な水が欠かせないと、海と山に関わる人々が参加するもの。2010（平成22）年は約50アールの元放置竹林に広葉樹のクヌギ苗約1,500本を植樹した。後者は、高齢化などで働き手のいない農家をサポートするため、農作業の手助けや竹林整備などを行う。合馬校区まちづくり協議会地域振興部会・清永賢治会長は「合馬地域は豊かで活力あるむらづくりを目指してきました。今後も『合馬たけのこ』を中心に特産ブランドの開発、直売所施設の充実、四季折々のイベントの企画など、都会の人と共に楽しめる里山にしたい」と語る。

参考：『市街化調整区域の施策に関する研究（中間報告書）第2篇　福岡市の市街化調整区域における農村集落状況調査』（(財)福岡アジア都市研究所、2009年3月）

合馬地区

大賑わいの「たけのこまつり」

「合馬復元の森」植樹活動

ドイツ・ゲルスバッハ村の取組み
～わが村には未来がある～

(財) 機械振興協会経済研究所 研究員/元(財)福岡アジア都市研究所 研究主査　山本 匡毅

「わが村には未来がある」コンテスト

ドイツでは農村景観の維持を目的として、40年間に渡り「わが村は美しく」コンテストを実施してきた。近年、タイトルを実態に合わせるため、「わが村には未来がある」へ変更された。コンテストは行政範囲で区分されており、「郡、地区、州、連邦」の4段階から構成される。その他に各国から代表が出て競うヨーロッパ大会がある。コンテストの効果により、村がきれいになることによる観光地の価値増大や住んでいる人たちの住環境、社会環境の改善が期待できる。1975～1990年にはコンテスト参加が多く、一種の流行となった。この時は村の美化がメインで、外観が中心であった。2000～2001年のコンテストでは、基本コンセプトが変更された。それは社会性と経済性の導入である。景観だけではなく、社会生活の中身、住民参加の活発さ、経済性等を重視し、この審査において4つの共通な基準を設定している。①発展と経済イニシアティブ、②社会的・文化的活動、③古い建物の維持活用などの建設・土地利用、④緑地・花壇・公園といった緑の発展、⑤村の中の景観である。郡（広域自治体）は、コンテストを応募から選考まで支援している。

ゲルスバッハ村の取組み

コンテストで優勝した村の一つがドイツ南部バーデン・ビュルテンベルク州レーラッハ郡役所から車で1時間ほどの山間にあるゲルスバッハ村である。ここは1970年代後半から村の発展のために、村を改善していく試みを進めてきた。1999年には農業に関する調査を行い、43戸の兼業農家（近接地域でのオフィス労働、工場労働）、3戸の林業も行っている専業農家があることが判明した。かかる村の特性を活かして、農業と観光業を組み合わせることにした。具体的な活動として、「わが村には未来がある」コンテストへの参加がある。コンテストの事業として、ローマ時代の塀の再生、ガラス産業の展示を行い、遺跡などを外へアピールするインフラづくりを行った。その結果、コンテストでは「郡、地区、州、連邦、ヨーロッパ」の全レベルにおいて金賞を獲得した。今後の村のポテンシャルとして、①日帰り観光客の増加、観光ガイドを自分たちで行う観光業、②地元の牛乳を使用して、地元農家が乳業を続けられるようにするチーズ工房がある。このうち観光施設（観光案内所）はすでに完成し、農産物加工も1995年から牛肉の販売を行い、「ゲルスバッハ」をブランド化した。さらに「わが村には未来がある」コンテストの効果としてワーキンググループ活動の中で環境保護意識が向上し、例えば燃料の石油からペレットへの転換が生じ、個人的需要としても各戸でソーラーパネルを設置する投資も行うようになった。（以上、2009年3～4月に実施した（財)福岡アジア都市研究所のドイツ農村調査による）

福岡市への示唆

福岡市は、周辺部に市街化調整区域を有し、農業生産が活発である。他方で農業集落の活力は低下傾向にある。しかし草場地区（P12～13参照）のように、かつての純農村的な美しい「村」がまだ残っているのも事実である。このままなし崩し的に農業集落を失っていくのは惜しい。農業集落は「都市アメニティ」であるというコンセプトの下、都市近郊の立地を活かしつつ、ドイツの「わが村には未来がある」のような集落の魅力競争を通じて、地域再生を試みる価値があると思われる。その際には、校区、区、市のそれぞれのレベルで基準を設定し、地域の到達目標を示すことが望ましい生活空間の構築につながると考えられる。

以上のドイツでの取組みは、景観と生活・経済を両立した手法であり、福岡市も参考にすべき試みといえる。

「わが村には未来がある」金賞のゲルスバッハ村全景

連邦コンテストでの金賞の賞状

観光用に設置したオブジェ

村の建物の一部にはソーラーシステムがある

まとめ

豊かな農山漁村は国際都市の新たな条件

～福岡市の宝、山紫水明・白砂青松を守る施策～

中村学園大学 流通科学部 教授・流通科学研究所長 甲斐 諭

外国人が絶賛する福岡市の豊かな自然と農山漁村

私は長く九州大学でアジアからの留学生を預かり、今は中村学園大学で中国人留学生と日々接している。最近、中国の地方都市に一時帰国していた留学生が戻ってきたが、喉と目が痛いという。聞けば「スモッグにやられた」とのこと。福岡の空はきれいだと再認識したそうである。

友人の中国人妻は博多湾での貝掘りが大好きである。中国の海岸ではとても貝掘りなどできないと力説する。以前訪中した時、橋の上から泡立ちながら流れる川面を写真に撮ろうとした友人が、飛んできた警察から厳しく阻止された。実は上流に製紙工場があり、汚水が流出しているのだそうだ。河川が汚染されているので、海浜も同様であろう。貝の身は汚染が濃縮されている可能性がある。

北京、上海、ソウルにある大学の教師が時折訪ねて来てくれる。福岡の市街地を案内してもあまり興味を示さない。世界の大都市から来た彼らを惹きつける魅力は市内の商店街にはないらしい。だが、農村部や海岸に連れていくと途端にカメラを取り出し、シャッターを切る。私は調査で中国や韓国によく行くが、農村を訪問すると都市と農村の経済格差に驚かされるし、確かに農村の景観は良くはない。

台北やマニラの市街地を流れる川は綺麗とは言えない。ハノイに1か月ほど滞在したことがあるが、早く福岡に帰って清流が見たかった。

昨秋、東京からの来客をつれて西区に焼きガキを食べに連れていった。景観と味を非常に気に入ってくれた。福岡市には綺麗な田園があり、清流があり、焼きガキ小屋がある。これこそが海外や東京からの来客にとって、国際都市・福岡市を魅了する宝であると言えるのではなかろうか。

中国・山東省で井戸を掘る農民

ミャンマー・ヤンゴン近郊の農村

危機に瀕する福岡市の農山漁村の景観

だが、福岡市の山林や農地を所有し管理する経営主が高齢化し、後継者不足のため、山は間伐されず、農地は耕作放棄地が散見されるようになった。林地や農地の荒廃化が進み、福岡市の宝が危機に瀕している。そのためか、城南区ではイノシシが出没し、作物を食い荒らす。我が家の小さな菜園と花壇はミミズを求める野生動物に掘り起こされ、野菜や花が台無しにされた。市内の「生物多様性」に悩まされている。

福岡市西区では、道路拡幅や住宅用地などのために農地が急速に減少している。残った農地ではビニールハウスが建てられ、効率農業・集約農業が展開されているが、景観の視点からは問題がある。

博多湾のアサリは市外の業者によって乱獲されて、市民の憩いの機会が減少している。湾内の埋め立て時に漁業権を放棄したために、市外の業者を有効に排除できないらしい。

外国人や東京からの来客を魅了する福岡市の宝である豊かな自然と農山漁村は、いま崩壊の危機に直面しているのも事実である。

景観を重視する欧州連合の共通農業政策に学ぶ

ヨーロッパを旅した人は、市内の歴史的建造物に感嘆し、郊外の美しい田園景観に感動する。世界的な都市のパリやロンドンを出てしばらくすると、牛や羊が草を食む、ゆったりとした美しい景観を楽しめる。

それには仕掛けがある。欧州連合の共通農業政策がそれである。共通農業政策は1962年の導入後、農畜産物の過剰生産を招いたとの反省から92年に改革され、穀物や牛肉等の支持価格を大幅に引き下げるとともに、直接支払い制度を創設して農業の維持を図った。さらに2000年、03年、09年の改革を経て、共通農業政策は農業環境政策に重点を移している。特に環境負荷の軽減、景観の保護等に資する農法を推進するため、環境に配慮した農法を最低5年間行う農業者に対し、補助金を支給している。いまや欧州連合加盟国では、改革された共通農業政策のお蔭で、消費者は美しい景観を楽しみつつ、安全な食料を適切な価格で入手することができるようになっている。

イギリス・ロンドン郊外の牧場

イタリア・ミラノ郊外の農場

デンマーク・コペンハーゲン郊外の農場

小さな酪農家が支える世界的観光国・スイスの景観

スイスを旅行し、美しい山岳地方の景観に感動された方は多いと思う。スイスは欧州連合に加盟してはいないが、同様の農業政策を採用している。緑したたる草地に牛が放牧され、美味しいチーズが生産されるのも零細酪農家を支えている環境に配慮した農業政策のお蔭である。

世界的に有名なエメンタールチーズを生産する酪農家を調査したことがある。草地に40頭の乳牛を放牧し、搾乳して、450万円の所得を得ていたが、その半分は直接支払い制度からの補助金であった。しかし、補助金を受けるには、草地を良好に維持するなど環境に配慮した細かな規則を守ることが、義務づけられていた。

その補助金支給の根拠である農業政策を支えるのは税金であるが、美しい景観を求めて全世界から観光客が集まり、国内に観光収入をもたらすので、納税者も納得しているとのことであった。

山紫水明・白砂青松の環境と農山漁村を守る施策を考える時期

福岡市の農林水産業が環境に配慮した形態で維持され、グリーンツーリズムの資源になれるように施策を検討する時期に来ている。外国からの多くの観光客を山紫水明・白砂青松の福岡市の奥座敷の農山漁村で歓迎したいものである。

もうじき室見川の上流でホタルが乱舞する。今年も蛙の合唱を聞きながら、幻想的な雰囲気を楽しみたい。

スイス・アルプスの麓の放牧地での筆者

スイス・アルプスの麓の採草地

スイス・エメンタール地方の農場

スイス・エメンタール地方の農家

かい さとし

1944年台湾生まれ、宮崎県出身。1973年九州大学大学院博士課程修了。農学博士。九州大学助手、助教授、教授を経て2000年退官（九州大学名誉教授）。同年、中村学園大学流通科学部教授・流通科学研究所長。内閣府食品安全委員会専門委員、福岡市農政審議会委員、福岡市食の安全推進協議会会長など。『食農資源の経済分析』農林統計協会、2000年、『食品流通の最前線』中村学園大学、2003年など。

5「永遠に完成しない街づくり」

～大阪・淀屋橋地区～

九州旅客鉄道株式会社 事業開発本部企画部不動産活用課 主席
元（財）福岡アジア都市研究所 研究主査
兼子 慎一郎

東京の「トキア」、梅田の「イーマ」や「淀屋橋WEST」、福岡の「イムズ」など、全国の商業施設、飲食店街などの開発やリニューアルを手掛けた人物がいる。その人物こそ、株式会社ケイオスの代表取締役・澤田充さんだ。
澤田さんは、商業者側がモノを売る場所を商業者視点の「売り場」と言わず、お客さまがモノを買う場所、お客さまの目線に立って「買い場」と表現するなど、卓越したビジネスセンスを持った人物である。そして、澤田さんがお客さま目線で作った「買い場」には、多くのお客さまで当然のように賑わっている。
澤田さんのモノを見る目、またモノに新たな価値を与えるブランディング戦略は、商業施設や飲食店街などのプロデュースのみに止まらず、街づくりの場面でも発揮されることになった。
今回、大阪市のキタ（梅田）とミナミ（心斎橋）の中間であり、ビジネス街である淀屋橋地区を紹介する。

大阪・淀屋橋地区とは

江戸時代に、日本一の豪商・淀屋が架けた淀屋橋。かつて、天下の台所と呼ばれ、日本中の諸藩の米蔵が集積していたこの地は、明治以降は大阪を代表するオフィス街として発展。現在でも国登録有形文化財のガスビル（大阪ガスビルディング）や大阪倶楽部、国指定重要文化財の綿業会館など歴史ある建築物や、江戸時代から続く老舗の料亭も残っている。しかし、大阪の経済が冷え込むと、大阪に本社を置く多くの企業は東京に移り、空洞化した街となった。それが一昔前の淀屋橋地区であった。

2008年5月 オフィスと商業の複合施設
「淀屋橋odona」オープン

澤田さんが街づくりに携わったきっかけ

仕事が終わるとすぐに帰る、そんな魅力のない街であったが、澤田さんの手により、街は生まれ変わった。澤田さんが街づくりを始めたのは、あるビルオーナーから1階の空室100坪に店舗を入れたいと相談を持ちかけられたことがきっかけであった。当時は、オフィスビルの空室を1室埋めるだけでも難しく、街のブランディング（ブランドの構築）をして埋めようという発想から、淀屋橋地区の街づくりを始めた。澤田さんは行きつけのスペイン料理店のオーナーに自らの街づくり構想を語り、出店を持ちかけた。その話に興味を持ったオーナーは、その翌日、自転車で空き店舗を見に行き、出店を決めたのであった。

ケイオス代表取締役・澤田充さん（淀屋橋にて）

街のポジショニング

淀屋橋という街には、キタ（梅田）にもミナミ（心斎橋）にもない歴史的建造物が残っていること、経済の中心としてこれまで発展してきた経緯を考慮のうえ、街を観察していくことで淀屋橋地区の街づくりのコンセプトを定めた。街の特性としては、質の高いオフィスワーカーが集うアッパーグレードであり、かつコンサバティブ（保守的）であるとし、若者ではなく大人が楽しめる街をつくっている。そして、そのプロジェクトを「淀屋橋WEST」と名付けた。

バロック音楽の楽団も会員

「淀屋橋WEST」スタート

2003年5月に、僅か3店舗の飲食店からスタート。最初の3店舗のオープン日は、これからの淀屋橋を作っていくという想いを込めて、「入村の儀」と名付けた。8年目を迎えた今では、飲食店のみならず、ここでしか買えないブランドの物販店、文化庁芸術賞優秀賞などを受賞し、日本のみならず世界的に評価されているバロック音楽の楽団、「人が満足する落ち着き」をコンセプトにクオリティーを追求したビジネスホテルなど、47店舗まで拡大している。

最初は赤提灯と定食屋しかなかったという街、淀屋橋地区。一人でも立ち寄れるようにカウンターを設けた飲食店舗が多い。スペイン北部のバスク、カタルーニャ地方に多く見られる炭火焼き料理を提供するバルや、日本人で二人目となるカヴェリエレ（騎士）勲章を受章したシェフが腕をふるうイタリア料理店など、確実に魅力ある街へと進化している。

初めに出店したスペイン料理店

建物のコンバージョン（用途変更）

店舗入口にも工夫を凝らしている。これからお店を利用するお客さまとオフィスビルから帰る人の動線が重ならないように、外壁を改修するなどして全店舗で新たに入口を設けた。

また、夜は淀屋橋WEST各店舗からの光が通りに漏れ、暗い通りを明るく照らしている。それは、あたかも街の当事者であることの証でもある。

大人のための高級感が漂う店舗

写真提供（すべて）：株式会社ケイオス

所員雑感

澤田さんと話をして印象に残ったのは、「大阪というフレーズで思い描くイメージは何ですか。おそらく、お好み焼き、串カツ、通天閣などでしょう。しかし、それらの言葉で、大阪の全ては語れますか。人の思い描くイメージとはあいまいなものです。また、人の思い描くイメージは、プロデュースいかんによって作ることは可能です。」という言葉だ。

澤田さんの街づくりには、随所にこの考え方が生きている。淀屋橋はビジネス街であり、かつては終業と同時にオフィスワーカーが地下鉄で去る場所であった。しかし、淀屋橋をブランディングしていく時に、街の特性を分析すると、歴史的な建造物や老舗の料理店などの資産が点在していることに気付き、街が大きく変わるポテンシャルを秘めていると思ったそうだ。埋もれたモノに光を当てることによって、淀屋橋地区の街づくりを進めている。

また、澤田さんの街づくりのキーワードは、「永遠に完成しない街づくり」である。ものごとは完成された時がピークであり、時間が経つと廃れていく。それならば完成させない方がいいというものだ。澤田さんは、街は消費するべきものではないと話す。完成しない街は、人と人とのつながりにより、常に新しい価値を生み出していく。澤田さんの考えに賛同し、「淀屋橋WEST」に参加する店舗も年々増えており、まさに永遠に完成しない街づくりが進んでいる。

行政やディベロッパーに頼まれて始めたわけでも、街づくり協議会のように組織化されたわけでもない。澤田さんが「勝手に」始めた「淀屋橋WEST」プロジェクト。それは、自らオフィスを構える淀屋橋地区が、街に愛着を持つ人がくらしていく街になって欲しいという思いからスタートした。澤田さんの言う「くらす」の定義は、単に住居を構えて生活をするということでなく、街に愛着を持つ人が過ごすということ。つまり、淀屋橋で働く人でも街に愛着があれば「くらす」という意味である。8年目を迎えた今は、街づくりを始めた当初に思い描いた住宅（マンション）建設も進み、淀屋橋地区は、ビジネス街から人が暮らす街へと進化しつつある。今後も、進化し続けていくであろうこの街から目が離せない。

福岡市のビジネス街である博多駅の周辺も、淀屋橋地区のように、ビルの低層階にはお洒落な店舗が入居し、大人が楽しめる街へと変わっていくことを期待したい。

福岡アジア都市研究所セミナー

シンポジウム「福岡の都市型風景街道の魅力を探る」

■挨拶　吉田 宏（福岡市長）

■活動報告
①天神再発見イベント報告
盛田 裕一（福岡天神ライオンズクラブ会長）
②まち歩き報告
帆足 リエ（西日本リビング新聞社統括編集長）
③研究報告及び提言
石橋 知也（福岡大学工学部助教）

■基調講演　『長崎さるく博の成功の秘訣』
田上 富久（長崎市長）

■パネルディスカッション『路地から福岡市のまちづくりを考える』
（コーディネーター）井上 裕之（西日本新聞社都市圏総局長）
（パネリスト）出口 敦（九州大学大学院人間環境学研究院教授）
大貝 知子（大貝環境設計研究所所長）
萩尾 正典（福岡市住宅都市局都心再生課長）
上田 啓蔵（はかた部ランド協議会）

■提言　樗木 武
（福博：都市シーニックバイウェイ研究会座長、（財）福岡アジア都市研究所理事長）

■主催：福博：シーニックバイウェイ研究会
■共催：（財）福岡アジア都市研究所、福岡市、西日本新聞社、（社）日本風景街道九州ネットワーク、We Love天神協議会、博多まちづくり協議会、道守ふくおか会議、（社）日本道路協会

■2010年3月24日（水）12:30～15:30
■西日本新聞会館16階
福岡国際ホール

主旨

玄界灘風景街道は、唐津～福岡に至るルートを中心にしている。弥生時代から2000年の歴史を持つ大陸交流の舞台となった街道だが、今日では若者の街大名、九州最大の繁華街天神・中州・情緒あふれる博多の町、由緒ある寺町など国道202号線(国体道路）は都心を貫く都市型風景街道の舞台でもある。

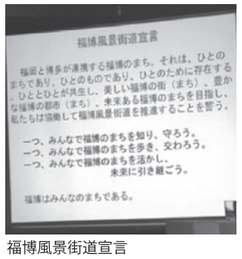
都市型風景街道は全国的にも珍しく、モデルも少ないだけに多くの課題を抱えている。しかし来春開通予定の九州新幹線は新築の博多駅ビルとともに、福岡の都市づくりに大きなインパクトを与えるのは確実である。

福岡市の2大拠点となる博多駅と天神を結ぶ福博都心は都市の魅力アップが求められている。その具体化に向けて議論するのが、福博：都市シーニックバイウェイであり、このシンポジウムである。

概要

「福岡の都市型風景街道」を研究する福博：都市シーニックバイウェイ研究会、関係団体と共に、福岡市のまちづくりを研究する当研究所が取り組む新たなまちづくりの可能性を、市民の皆様と共に考えることを目的に開催した。

このシンポジウムでは、長崎市長による基調講演をはじめとして、福博：シーニックバイウェイ研究会による研究報告や、各界の方から「福岡市の都市型風景街道」についてその魅力と問題点を再認識するとともに、路地・路地裏から発信する新たなまちづくりの方法等について熱く語っていただいた。最後に「福博：シーニックバイウェイ研究会」の座長を務める当研究所の樗木理事長より提言として、「皆さんの力で福博風景街道を推進することを誓う」との宣言を採択した。

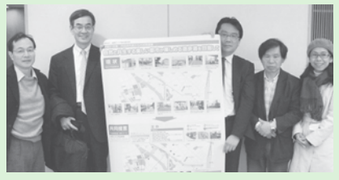


福博風景街道宣言

長崎市長による基調講演

パネルディスカッション

平成21年度市民研究員も提言！「平成福博街道」


『人と自然が共生する美しい都市』をテーマに研究を行い、共同提言をシンポジウム会場に展示した。

フォーラム「福岡市におけるアジア政策の未来」

ー福岡女子×東京女子が考える「福岡でアジアを活かす・活きる道」ー

3月30日に開催した都市セミナーの模様を一部紹介する。本セミナーは3部構成をとっているが、紙面の都合上、ここでは主旨と概要のみ紹介する。詳細内容については、URCのホームページをご覧いただきたい。

（財）福岡アジア都市研究所 研究主査　山下 永子

■構成
1部：URC自主研究報告
山下 永子（（財）福岡アジア都市研究所研究主査）

2部：福岡への提言
岸 清香（都留文科大学講師）
並木 志乃（東京大学大学院情報学環交流研究員）
伊藤 香織（東京理科大学准教授）

3部：対談+質疑応答
モデレータ
山下 永子（（財）福岡アジア都市研究所研究主査）
ディスカッサント
【福岡女子】佐々木 喜美代（福岡市広報課長）
【福岡女子】帆足 千恵（（財）福岡観光コンベンションビューロー広報係長）
【東京女子】2部の提言者

■主催：（財）福岡アジア都市研究所
■共催：福岡市
■後援：（財）福岡観光コンベンションビューロー

■2010年3月30日（火）14:30～17:00
■福岡ビル大ホール

主旨と概要

2008～2009年度、URCは、福岡市の20年以上のアジアに焦点を当てた施策「アジア政策」の成果を検証する研究を行った。長期にわたる継続的な取り組みは、大きなネットワークや資産を形成したはずであり、それが、今日の世界的な地域間競争社会にあって、福岡が地域の個性や魅力として世界に対してアピールできるものになっていると考えたからだ。

そして、本研究によって、福岡には多数の貴重なアジアの創造的な知の財産、重層的な人のネットワークが蓄積されていることがわかった。しかしながら、それらが十分に活用されていないし、またそれ以前に市民のみならず対外的に知られていないということも同時に明らかになった。

本フォーラムは、「アジア政策の資産を活かしていくために、私達はどうしていったらよいのか」ということをテーマに3部構成で開催した。1部ではまずURCからの研究結果の報告を行った。それを受けて、2部では、研究を通じて知己を得た3人の若手新進女性の研究者に、それぞれの専門の立場（岸先生：国際文化交流・美術、並木先生：情報、伊藤先生：都市計画）と、「東京女子」の視点から具体的な提言をいただいた。そして3部では、福岡市がその提言を、今後の施策に反映していくために、市の広報、集客交流戦略を担当する2名の女性「福岡女子」を加え、オープンな雰囲気での対談・議論を行った。

この一連のプロセスを通じて、会場全体で福岡市のアジア政策の活かし方を検討する雰囲気を作り出し、実際に展開可能な提言やプログラムが作り出されていくきっかけになることを期待してこのような構成とした。

なお、今回、「東京女子」「福岡女子」というちょっと誤解を招きやすい、センセーショナルな言葉をあえて使ったのは、新たなムーブメントを起こしたいという意図が背景にあったからだ。これまでのまちづくり論議が男性中心に進められ、まちの消費の主要な担い手であり、まちのヘビーユーザーである女性の意見があまり反映されずにきていたのではないか、今後は、もっと女性にまちづくりに関心を持ってもらって、参画してもらいたい。そういう思いもあり、女性が興味をもって参加しやすいようなタイトルをつけた次第である。

おかげさまで通常の都市セミナーよりも女性、特に若い年代の女性に多く来場いただくことができた。今後も、あらゆる層、老若男女がまちづくりに興味を持ってもらえるような都市セミナーを開催していきたいものである。

※所属・役職はセミナー当時のものです。
※シンポジウムとフォーラムの全容は、当研究所のホームページに採録しています。ご覧ください。

データで見る福岡市 vol.9

Data of Fukuoka city

（財）福岡アジア都市研究所 研究主査　田村 一軌

国勢調査からみる福岡市の人口・住宅

今回から2回にわたって福岡市の様々なデータを地図上に表現した「データ地図」をいくつかご覧に入れたいと思います。

今回は平成12年と17年の国勢調査（小地域集計：町丁字別集計）のデータを用いて、福岡市の人口と住宅についてのデータ地図を作成しました。そして、その特徴に関する都市政策的な解釈を試みたいと思います。

※今回分析に用いたデータはすべて「政府統計の総合窓口（http://www.e-stat.go.jp）」からダウンロードできます。

人口分布

まずはじめに、人口分布から見てみましょう。福岡市にはおよそ140万人が暮らしていますが、その地理的分布には粗密があります。

図1は、平成17年国勢調査のデータを使って、町丁字別の人口密度の値によって地図を塗り分けたものです。色が濃いほど人が高密に住んでいることを示しています。これをみると、福岡市の人口は鉄道沿線を中心に分布していることがわかります。博多区と中央区を中心に、東区、南区、城南区、そして早良区の北部と西区の東部にかけて、人口密度の高い地域が大きな塊になっています。この塊は（この図には表示されていませんが）、周辺の春日市、大野城市、太宰府市、粕屋町といった自治体にまで連なっています。

図2は、平成12年から平成17年の5年間での人口密度の変化を表しています。郊外では人口が減少し、鉄道沿線では人口が増加するという傾向が観察できます。鉄道を軸としたコンパクト・シティが形成されつつあるようにも見えます。

年齢分布

次に年齢分布を見てみましょう。図3は、平成17年における町丁字別の総人口に占める高齢人口（65歳以上の人口）の比率をプロットしたものです。これを見ると、西区の西部や早良区の南部、東区の東部など、都心部から遠いところで高齢人口の比率が高いことがわかります。また図4は、平成12年から平成17年の5年間での平均年齢の変化を示したものです。総じて市内全域で高齢化している様子が見受けられるものの、博多・天神周辺では平均年齢が低下している地区が存在することが見て取れます。

平均年齢が上昇している郊外部ですが、図2と見比べると、その中でも人口が増加している地区と減少している地区に分けることができそうです。郊外における、人口も増えなおかつ平均年齢も上昇するという地区の存在は、若い間は都心に住みその後郊外へと転居するという現象（平山[1]のいう『住まいの「梯子」』）を示唆しているのかもしれません。

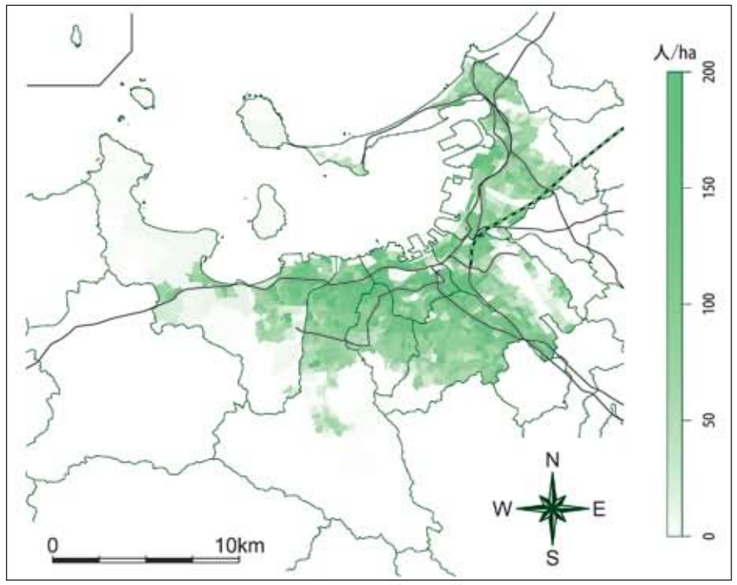


図1：人口密度（平成17年）

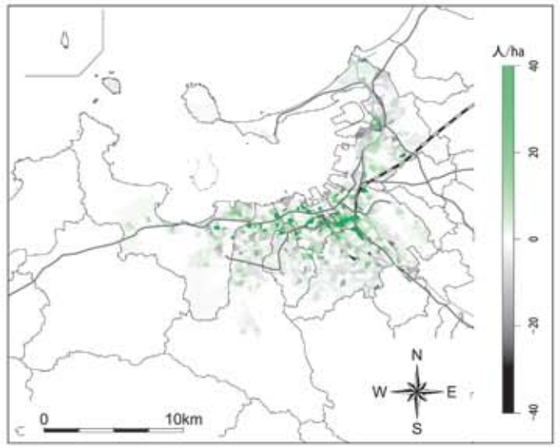


図2：人口密度の変化（平成12～17年）

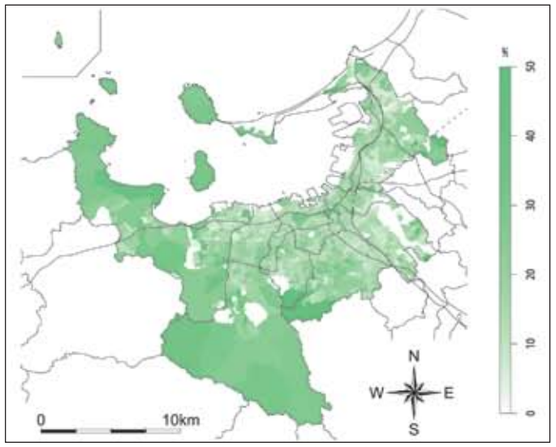


図3：総人口に占める高齢人口の比率（平成17年）

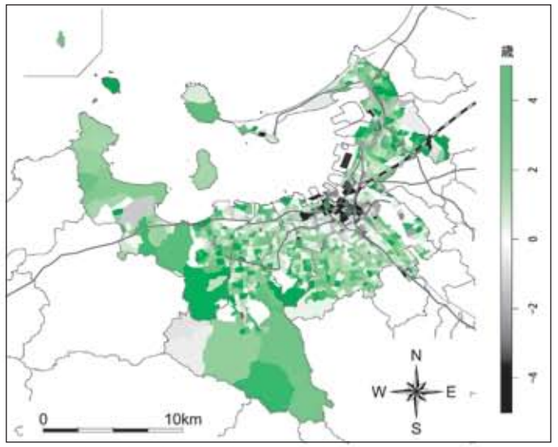


図4：平均年齢の変化（平成12～17年）

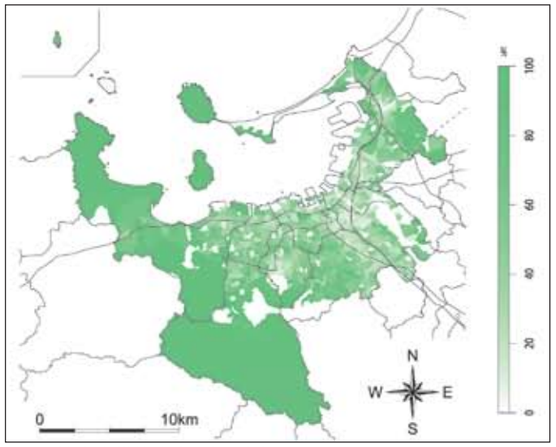


図5：持家世帯比率（平成17年）

世帯分布

もうひとつ、都心から郊外へという人の動きを示唆する地図をお見せします。図5は、町丁字別に住宅に住む世帯のうち持ち家に住む世帯の比率（持家世帯比率）のデータ地図です。都心部では賃貸住宅の比率が高く、郊外ほど持家住宅に住む世帯の比率が高い傾向がはっきりと見て取れます。ただし郊外でも大学周辺など単身世帯が多い地区では持家比率が低くなっています。独身時代は都心に住み、結婚して鉄道沿線の賃貸マンションに、さらには郊外の住宅を取得、というライフステージが（ステレオタイプではありますが）想像できるような気がします。

おわりに

国勢調査のデータを用いて作成した福岡市のデータ地図をお見せしました。今回は年齢と住宅という、福祉分野と関係の深いデータを用いました。福祉分野にGIS（Geographic Information System：地理情報システム）を適用した例として文献[2]があります。今回見たように「福祉」と一口に言っても、その地域によって置かれている状況は全く異なります。したがって、とられるべき施策も地域によって異なってくるでしょう。広井[3]は、「今後は『福祉』にいわば地理的・空間的な視点を導入していくことが重要ではないだろうか」と述べ、「福祉地理学」という分野を提起しています。そのような意味においても、データを地図に表現することで市内の状況が一目瞭然となる「データ地図」はとても役に立つツールです。私たちもこれからも活用していきたいと考えています。

参考文献

[1]平山洋介（2009）：住宅政策のどこが問題か. 光文社新書.

[2]福岡アジア都市研究所（2008）：福岡市における高齢者の居住動向等に関する調査研究.
http://www.urc.or.jp/syuppan/kenhou/19kourei.pdf

[3]平井良典（2009）：コミュニティを問いなおす. ちくま新書.

日韓少女漫画事情 ❶

韓国で愛される日本の少女漫画

―1960年代から現代まで、日本漫画はいつも人気―

福岡女学院大学 人文学部現代文化学科 准教授 佐島 顕子

人気の韓流映画・ドラマ、実は日本の少女漫画が原作になっていることがある。日本の少女漫画のツボが韓国のクリエイターを刺激し、韓国で再構築された世界が日本人の胸を熱くする。我々は感動を共有する隣国同士である。

ヒット作品の原作は日本漫画

2009年春に日本で公開された韓国映画『アンティーク』（監督ミン・ギュドン、主演チュ・ジフン）の原作は、よしながふみの『西洋骨董洋菓子店』。日本を含めアジアでヒットした映画『カンナさん大成功です』（監督キム・ヨンファ、主演キム・アジュン）も、原作は鈴木由美子の同名漫画。神尾葉子の『花より男子』も韓国でドラマ化されている。韓国の映画・ドラマ制作者が素材を探す時、日本の少女漫画は身近なコンテンツである。特に日本漫画を探そうと苦労しなくても、韓国の書店の漫画売り場の七割は日本漫画の翻訳版だから。

「漫画といえば日本」と定評があるため、一般視聴者の中には漫画が原作だと聞くと、日本漫画に違いないと思い込む人も多い。ヒットドラマ『宮』は、韓国王室の架空のロイヤルウェディングを描いたパク・ソヒの少女漫画だったのに、「日本の漫画を韓国に置き換えたんだろ?」という声をよく聞いた。

日本漫画が「わかる」読者たち

ここまで日本漫画が浸透しているのは今に始まったことではない。朝鮮戦争後、復興とともに漫画が出版されはじめた時、駐留米軍を通じてアメリカンコミックも入ったのだが、大勢を占めたのは日本漫画だった。韓国の読者は日本の漫画のおもしろさがわかる人たちだったのである。1960年代、『サザエさん』的な家族漫画の中から、特に純情な少女を主人公にした漫画が現れ、「純情漫画」と呼ばれた。韓国で少女漫画のことを純情漫画というのは、そういう理由で、今ではヒロインが純情かどうかは関係ない。日本語で純情漫画ではちょっと恥ずかしい気もするが、韓国語で少女漫画というと「乙女漫画」ぐらいの意味なので、語感の違いはお互いさまである。

そんな韓国少女漫画第一世代が瞳の大きな愛らしい少女を描き、少女漫画黄金期を築いたが、彼女たちが影響を受けたのは、手塚治虫・水野英子・わたなべまさこ等日本の漫画家だった。

『キャンディ』ショック

しかし、当時は軍事クーデタで政権を握った朴正熙の時代。漫画に限らずあらゆる創作活動や言論は政府の監視を受けていた。演劇・映画・放送番組のシナリオ、音楽レコードの歌詞、出版物の原稿は政府の検閲を受け、問題箇所を修正・削除しなければ世に出せなかったのである。

漫画の場合、一つのコマの中で男女が二人きりなのはいけない、ひざ上スカート・長すぎる前髪は風紀上問題、アクセサリーの多い派手な絵は奢侈心を刺激する、という厳しい基準を要求された。漫画とは「大人が小学生に与える健全な読み物」として位置づけられていたため、絵・ストーリー・メッセージともに、そこからはみだすことは許されなかった。だから登場人物はみんな良い子、大人に向かって悪態をつく悪ガキなど存在してはいけなかった。いわんや社会問題を扱うことは、朴政権の支配にケチをつけたとみなされ弾圧された時代である。だから漫画の中で貧しさとは甲斐性無しの父親のせいであり、社会矛盾を示唆するなどもってのほかだった。これでは漫画のテーマは深まらない。それで「薄幸の善良な少女が生き別れのお母様に再会して幸せになる」以上の作品が描けない少女漫画は70年代にはマンネリ化し、「漫画なんてつまんない」と読者が離れていった。そんな行き詰まりを打破したのが、TV放送で大ヒットした日本のアニメ『キャンディ・キャンディ』であった。

韓国では日本の大衆文化が禁止されていたといわれるが、禁止されていたのは日本語のままの文化であり、翻訳された文化なら問題なかった（もちろん韓国作品と同様検閲され、政府が問題とした部分は修正削除されたが）。

アニメ『キャンディ・キャンディ』の人気により、水木杏子・いがらしゆみこ原作の漫画も1979年海賊版が出版された。後に漫画家になった黄美奈は「笑顔はこれ、怒った顔はこれ、と決まった表現で済ませていた韓国漫画に対して、『キャンディ』は人物の多様な表情を描き分け、映画のような演出をすることにショックを受けた」と語る。

『キャンディ』のような日本漫画が売れることに気づいた業者らは、日本から漫画本を買い込むとセリフをハングルに貼り替えて印刷し、ばらまいた。こうした海賊版を韓国政府が摘発しだすと、業者は韓国人漫画家に、日本漫画をそっくりに写させた。作者名を韓国人名に変え、ストーリーや背景を韓国におきかえ、日本作品であることがわかる描写、規制をはみだす性的・暴力シーンは省いたり書き換える。ロシアの社会主義革命を扱った『オルフェウスの窓』（池田理代子）は、フィンランド独立運動におきかえる。ここまですれば、検閲官が日本の漫画を読んでない限り、海賊版・写しとはわかるまい。そのため80年代は、膨大な作品が韓国作品として流通してしまった。水野英子『白いトロイカ』はキム・スク名義、池田理代子『ベルサイユのばら』もチョン・ヨンスク名義で出版された。やがて検閲官も事情に気づくと、今度は漫画といえばすべて日本の写しではないかと疑い、本物の韓国作品が出版困難になったこともあった。（ちなみに1990年代に民主化政策が進んだ韓国で、それら海賊版・写し漫画は消え、今ではライセンスをとった翻訳版がほとんどである）

大好きなのは日本の漫画

80年代に韓国の少女たちを夢中にさせたのは、70年代の日本の少女漫画だった。萩尾望都・竹宮恵子など「24年組」の活躍により、少女漫画の質・量が飛躍的に向上した黄金時代である。わたなべなさこ『ガラスの城』、萩尾望都『ポーの一族』、竹宮恵子『ファラオの墓』、木原敏江『アンジェリク』、池田理代子『オルフェウスの窓』、美内すずえ『ガラスの仮面』、あしべゆうほ『デイモスの花嫁』などが一挙に韓国に流れ込んだ以上、市場は日本漫画に席捲された。

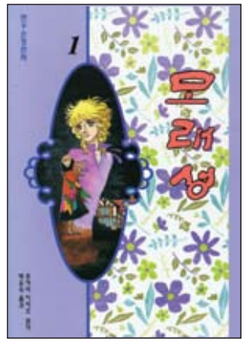
何も知らない少女たちは、この大量の日本漫画を韓国作品だと信じて愛読し、すべてを吸収して創作のお手本とした。後で真実を知った彼女たちの、だまされていたという苦い思いと、作品への感動が混ざり合う気持ちは複雑である。

80年代前半にデビューした韓国少女漫画家の初期作品には、日本の作品の影響が色濃く表れている。たとえばキム・ヘリンのデビュー作『北海の星』には、池田理代子作品と同じデザインのドレス、同じ髪型、同じポーズが散見され、同じ70年代日本少女漫画を愛読した者としては妙な懐かしさと嬉しさを感じる。「あなたも『ベルばら』『オルフェ』が大好きだったのね」という一種の同志意識だろうか。

模倣の段階を通らなければオリジナル創作には至らない。英国の作家グレアム・グリーンも、少年時代に強い印象を受けた冒険小説のワンシーンが忘れられず、自分の作品の中で同様のシーンを一度書いてやっと自由になれたと語る。日本の漫画家も、手塚治虫以来の先行の漫画作品を模倣し影響を受けて発展した。韓国漫画界も、日韓両国の先輩作家の作品蓄積の上に発展したのである。そして今2000年代、韓国少女漫画の先端をリードする作品群は、非常に個性的である。

今、韓国の読者たちは日本の人気漫画と自国の漫画の両方を自然に楽しんでいる。ひょっとしたら漫画大国の日本の方が、海外漫画にふれにくいのかもしれない。「そっちの漫画、面白かったら、ちょっと見せて！」。漫画交流の原点はそんな貪欲な読者心理かもしれない。

『ベルサイユのばら』正規翻訳版。検閲済印が右下にある ©大元動画



『砂の城』（一条ゆかり）。検閲を通していない海賊版

『ベルばら』再来!?キム・ヘリンの革命物語『北海の星』©世宇文化社

猫が個性的な『CAT』（キム・ヒョンジュン）©ソウル文化社

少女漫画誌『WINK』。『コイバナ！～恋せよ花火～』（ななじ眺）が表紙を飾る ©ソウル文化社

さじま あきこ
1963年生まれ。福岡県出身。九州大学文学部大学院（史学）博士課程中退。福岡女学院大学人文学部現代文化学科准教授。共著『漫画研究の扉』（日下翠編、梓書院）など。パク・ソヒ『らぶきょん～Love in 景福宮』、『小説・らぶきょん』、チョン・ヘナ『タムナ～Love The Island』、イム・ジュヨン『シエル』等の韓国少女漫画を新書館から翻訳。

アジア太平洋都市サミット

■アジア太平洋都市サミット会員都市

●海外(19都市)
オークランド市(ニュージーランド)、バンコク市(タイ王国)②、ブリスベン市(オーストラリア)③、釜山広域市(大韓民国)、大連市(中華人民共和国)⑥、広州市(中華人民共和国)⑦、ホーチミン市(ベトナム社会主義共和国)②、香港特別行政区政府(中華人民共和国)、ホノルル市(アメリカ合衆国)、イポー市(マレーシア)、ジャカルタ特別市(インドネシア共和国)③、済州特別自治道（大韓民国）、クアラルンプール市(マレーシア)、マニラ市(フィリピン共和国)、浦項市（大韓民国）、上海市(中華人民共和国)、シンガポール、ウルムチ市(中華人民共和国)①、ウラジオストク市(ロシア連邦)⑨
●国内(9都市)
鹿児島市、北九州市④、熊本市、宮崎市、長崎市、那覇市、大分市、佐賀市、福岡市④

注:○数字はfU+掲載号数です。

会員都市紹介 ロシア連邦・ウラジオストク市

福岡市市民局文化振興課主査/ 元(財)福岡アジア都市研究所交流推進係長 アジア太平洋サミット事務局 山本 公平

東方を征服せよ！

先日、今年9月に第9回アジア太平洋都市サミットが開催される、ロシア・ウラジオストク市を訪問した。私自身、ロシアの地を踏むのは初めてであり、準備段階からビザの取得や宿泊先の確保など、少々勝手が違っており戸惑ってばかりいた。

福岡からウラジオストクへは、仁川（インチョン）空港経由で飛ぶのが最も便利。仁川からの飛行時間は2時間半程度と結構近い。日本からだと最短で1時間半と言うから、ロシアは本当に隣国だと実感出来る。これは結構重要な事実である。

一部の、特に新潟などの日本海側の地方では、かなりロシアとの交流に注力しているようだが、将来大化けする可能性もありそうだ。ここのところずっと注目の的である中国も、ちょっと前までは、人的にも経済的にもあまり交流がなく、ほとんど話題に上ることさえなかったのを私もつい忘れがちになる。確かに、人口規模では中国に劣っているが、ついこの間まで、世界の2大勢力の一翼であったわけで、文化的資産や科学技術面での蓄積は（海外流出が激しいとは言え）まだまだ健在であるし、強大な軍事力で周辺諸国に睨みをきかせている。

現在は金融恐慌の大打撃で、一時のような経済的熱狂は伺えないが、世界最大の領土内に眠っている、石油を始めとする豊富な地下資源等の原資は圧倒的であり、経済・人物交流がさらに推進されれば、（軍事以外でも）再び巨大な影響力をもつ隣国となるだろう。

そんなロシアの極東の地ウラジオストクには、飛行機を乗り継いでも数時間程度で行き着けるわけだが、この都市名は「東方を征服せよ！」といった意味にも解釈出来るそうである。道理で近いわけだ。しかし現在では“征服”は“進出”や“貿易”に置き換えられるのかもしれない。

ウラジオストクは近くて遠い？

このように結構近いウラジオストクではあるが、実はかなり遠いのだ。なに訳の分からんことを言っておるのだ！と思われるかもしれないがこれは本当だ。例えば、仁川から飛ぶウラジオストク航空の機内食。（写真1）写真ではよく分からないかも知れないが、まるでトルストイの世界に連れ込まれたようだ。黒パンである。ごろごろとした木の実（オリーブ？）たくさんである。生っぽいハムの切れ端である。分厚い鮭の切り身である。（決して塩鮭ではない）見た目かなり素朴だが、これが意外に旨い。

空港に到着するとそこはもう別世界だ。まず飛行機から降りようとすると、何らかの指令が下ったようで、全員着席だ。そして、軍服姿でレーザー銃のようなものを手にした男が、乗客一人一人に照準を合わせながら、こちらに向かってくるのだ。おそらくインフルエンザ等の検査であろうが、恐ろしいこと甚だしい。なんか言われて連行されたらどうしよう。永久凍土で強制労働、なんて時代錯誤の妄想が頭をよぎる。「スパシーバ！ハラショー！ドストエフスキー！ボリショイ！ボルシチバンザイ！」私のロシア語力の限界を駆使した言い逃れを、頭の中で反芻しながら、自分の番を待ち受けるのは生きた心地がしなかった。タラップから降りると、ターミナル送迎バスが待ち受けており、ぞろぞろと乗り込むと程なく出発。しかし5メートルほどでいきなり停止。「故障？事故？革命か！戦争か！」そして、乗ったのと反対側のドアが開き、みんなぞろぞろと間近の建物に向かい出す。なんのことはない、飛行機の目の前の建物がターミナルだったのだ。つまり、きっちりと公務員的に、仕事が無駄なく？分担されており、持ち分の業務を極めて形式的に真面目に遂行しておられるわけである。ちなみに、タラップの周辺にも多くの軍人や制服姿の職員たちがいたが、彼らも多様な業務を分担（今風に言うとワークシェアリング）しているようである。効率だけが絶対の価値観ではないことを思い知った。

ウラジオストク市内までの道のりは1時間以上、特に現在は2012年に開催されるAPECの準備のために、道路工事真っ最中、しかも大雪の後で、凍結防止の砂をまき散らしているためどこもかしこもドロドロの灰色だ。車窓から眺める景色は寒々しく、木々までもが灰色で、ロシア映画で見た景色が思い出される。（写真2）

しかし、市内に到着すると、イメージが一変する。そこはもうヨーロッパである。「日本に最も近いヨーロッパ」と言うキャッチフレーズは、はったりではなく真実だった。

建築物等の街並みや金髪長身の人々など、明らかにアジアとは異質である。例えばウラジオストク駅。ここはシベリア鉄道の終着駅として有名だが、歴史的で格調の高い建築で観光名所ともなっている。（写真3）そして9頭身はあろうかと思われるスレンダーな人たち。街中にファッションモデルがあふれている様だ。

ロシアは欧米か？

そんなヨーロッパ風のロシアであるが、私の感覚としては、やはり共産主義の国というイメージが強く、政治体制なども中国やベトナムなどと似ているのかなあと、なんとなく思っていた。今回の訪問では、副市長と面会することとなっていたため、これまでの数少ない私の海外経験からすると、かなり形式的でしかも豪華に装飾の施された、あまり事務的でない会合が祝宴的に催されるのだろうかと思っていたら、全く予想を覆された。

まず最初の驚きが副市長である。（写真4）外見がとても若々しい。しかも2枚目。ウラジオのブラピと呼びたくなる。実は外見だけでなくホントに若い、27歳。人口50万以上の都市でこれは凄い。市長も30歳台とのこと。そして、さらに大変実務的である。副市長本人が事業の詳細を把握しており、逐一確認・質問をしていく。このため、予想以上に長時間の打ち合わせとなったが、ウラジオストク市が、アジア太平洋都市サミットに求めているものが、想像していた以上に実務的、実際的な議題であり、会議内容と具体的成果であることが良く理解できた。

欧米のエリートを思わせるこの副市長の姿勢が、今後のウラジオストクをどう変えていくか非常に興味深い。

寒い国に来たURC

副市長との綿密なミーティングとは別に、仕事が出来るだけでなく、とっても知的で優しくしかもチャーミングな（童話に出てきそうな）ウラジオストク市職員と、さらに細かい事項を数回にわたり確認し合った。そして、視察予定の場所などを巡る途中で、海に立ち寄ってもらった。3月下旬にもかかわらずなんとカチコチだ。（写真5）はるかかなたまで、流氷が埋め尽くしており、やはりここは遠くて寒い国なのだと思い知った。だって3月の平均気温が約1度、平均最低気温はマイナス6度だそうである。北海道以下だ。そしてふと思い出した。小学生の時初めて自分の意志で選んだ本が、そう言えばロシアの話だったことを。舞台はモスクワだったかも知れないが、その話の中で凍結した川をスケートで滑っていくシーンがあって、凄くうらやましかった覚えがある。

その時の夢が、こんなところで実現するとは。しかしさすがに、4月近くなると、氷も薄くなっているようで、時々落ち込む人がいるから気をつけるように言われたが、確かによく見ると、所々穴があいていたりする。だが、驚くべきことに、そんななかでも、毎日の様に氷の海の中を泳ぐ、血迷った人々のクラブがウラジオストクにはあるそうで、通訳の方も会員だとのことで案内して貰ったら、本当に泳いでいた。見てるだけで凍えてくる。

期待のウラジオストクサミット

こんなに日本から近いけれど、遠いウラジオストクだが、美味しい黒パンやサーモン、美しい街並み、そして市政府の意気込み。魅惑的な異国情緒の下、実際的で具体的な成果を目指す今年のサミットは、ウラジオストクで最も過ごしやすく、美しい景色が望める9月に開催される。

写真１：ウラジオストク航空機内食

写真2：こごえる景色はまるでロシア映画

写真3：格調高いウラジオストク駅

写真4：若き副市長とURC副理事長

写真5：これ実は海上です

「APCS通信」を通じたコミュニケーション戦略の展開

ーアジア太平洋都市サミット・都市政策情報発信事業ー

(財)福岡アジア都市研究所 研究主査 山下 永子

アジア太平洋都市サミット事務局は、コンテンポラリーな都市政策情報を発信すべく、2009年6月よりニューズレター「APCS通信（日本語・英語）」の発行を開始した。
このAPCS通信は、福岡アジア都市研究所の研究や事業のなかで、実際に訪れてみて「きゃっ！いいなあ～」「こんなんマネできんやろか～」「ステキ～」と思ったレアでホットでラヴリィな都市と施策に焦点を当て、これからの都市政策・都市運営のヒントとなるようなコト・モノをピックアップし、APCS会員都市のみならず、福岡市・APCS事務局と交流の深い都市・研究機関・メディア・市民の皆様に届けている。
今回は、これまでの発行号の中で、読者の皆さんから特に好評だった「都市のコミュニケーション」関連の情報を再編集してご紹介する。なお、APCS通信はアジア太平洋都市サミットブログ（そんなのあるの？？？、あるんです実は。http://summit.blogcoara.jp/apcsblog/apcspress/index.html）からダウンロードできます♡

こんなに洒落てると手が出るよね

◎ストックホルムの「行政出版物コミュニケーション」

北欧はスウェーデンの首都、ストックホルムは、スカンジナビアン・キャピタル（スカンジナビアの首都）を目指して、様々な施策を展開している。そして、それを市民の皆さんや他の都市などにきちんと知らせるために、色んなコミュニケーション戦略を展開中である。で、それが、流石のIKEAやH&Mの国オシャレなのである。しかも気取りや澄ました感じではなく、なんか愛らしくカワイイ感じなのがすごくいい。

そもそも市章じたいが、トランプ収集家が好みそうなキッチュでトボケタ感じのデザインで、親近感がわく。脈絡も意味もないが、なんか木馬にのってる気分になる。そして数年前から取り組まれているスカンジナビア首都キャンペーンのロゴもやさしい感じで、すっと馴染んでくる。冠の下に、髭をたくわえた王様の顔を落書きしたくなるのは私だけだろうか。とにかく「って感じ」なのだ。

市章　キャンペーンロゴ

このロゴは工事現場やインフォメーションの機械とか、色んなところに使われていて、すっかりすっぽり街に溶け込んでる。というのも、ストックホルムは、かなり色彩やデザインの統制を行政が頑張って進めてきているので、黄色白色水色は、どこにでもすっと収まりやすいのだ。

工事現場を覆うシートにもキャンペンロゴ

このロゴをみたら行政サービスだってすぐわかる

さて、本題の行政出版物コミュニケーション。日本では、市のマスタープランっていうと、通常、硬い、字が多い、難しい数字と地図が満載、重い、読む気がしない、一部のマニア向け、てか、市職員向けのもの。抜粋版であっても「手にとりたくなる」という類のものではない。しかし、ストックホルムの2030の都市ビジョンは、そのまんまカフェやインテリアショップに置けそうな位にオシャレ。しかも、中味も、メッセージ性があって、エモーショナルにまちづくりを呼びかけてくる感じのつくりになってて、「あ、まちづくりに協力したい」とか「まちが良いほうに変わっていくんだなあ」と市民に思わせるような力が感じられる。市民をエンゲージメント（巻き込んで力を借りる＝協働）させたいという思いが伝わってくる。

上左：ビジョン2030マップ
上中：ビジョン2030
上右：交通インフラ計画
下：その他

ビジョン2030
（冊子抜粋）

ビジョン2030(マップ)

交通インフラ計画
（冊子抜粋：グラフにも色彩統制）

福岡もデザイン創造都市を目指していた気がするけど、デザインがステキって出版物にほとんどお目にかかれない。デザイン創造都市というものは、意匠をカッコよく美しくするだけのことを指すのではなく、都市経営のビジョン、それを遂行していくための組織や体制のデザインを含んだところの都市の姿勢を示すもの。そういったことからも姿勢を示すビジョンの出版物をフレンドリーで優しく、人に見せたくなるようなカッコいい洒落たデザインにすることは、すごく大切なことだと考える。

「ほれほれ、うちのマスタープランオシャレやろ、だけん、福岡すいとーとぉ」なんて、福岡市民としての誇りアゲ↑アゲ↑のツールになるような出版物。コミュニケーション戦略があったらいいなあ。。。

図書館って本を借りるとこだけじゃないのよねん

◎バンクーバーの「多文化パワー増進図書館」

今、世界的な傾向として、コミュニケーション拠点としての公共図書館のあり方の見直し、新たな機能を加えて、ユニークなサービスを行う動きが活発化してきている。とくに、移民政策を積極的に行って来た都市では、新しいまちのことを知ってもらうために、一緒にまちづくりを行う仲間を募るために、また仲間と出会うために、人が集まる仕掛けや仕組みを整えて、休日は図書館へGO、失業した人も図書館へGO、就職に役立つスキルなら図書館へGO、というノリの取り組みをやっている（ように私には見えた）。

冬季オリンピックを開催したバンクーバーの図書館はダウンタウンにあって、建物はコロッセオみたいなデザインでなかなか存在感がある。そして、内部には開放感あふれるアトリウムがあり、沢山のカフェが並んでて、人々が思い思いの知的時間を過ごしてる。ときには演奏会なども催される。カフェ前のボードにはコミュニティのイベントや習い事やサークルのお知らせが満載。それだけではなく、各フロアはテーマごとに整理された本が開架されているのだが、各階ごとにそのテーマに関連するお知らせが「ご自由におとり下さい」って感じで置かれてる。

驚くべきは、多言語対応。そう、まちづくりに多文化共生の必要性が言われるようになって久しいが、近年は、「多文化共生から多文化パワー」という考え方への移行が進行中である。弱者的な扱い、社会包摂的接し方でなく、活力をもたらす新たな仲間として迎え、ともにまちづくりを行っていく。そういう発想の変化や浸透が、こういう図書館をすごく魅力的で価値ある場にしていっているのではないかと考える。

福岡の図書館は教育委員会の管轄なので、市民の教育や学びに焦点があたるのは当然のこと。でも、コミュニケーション拠点、しかも戦略拠点としての活用の余地はまだまだ沢山あるし、実力もある。

もっとオープンでわくわくするような図書館に、老若男女・色んな人種の人が集う、多文化パワーが生まれるような場に、これから益々なって行ったらいいなあ、と思う。図書館様、期待していますよん。

よその都市から学ぶことはとても大切なことなのだ

◎国際地域ベンチマーク協議会から学ぶアジア太平洋都市サミット

今回紹介した2都市は、2010年7月に福岡で開催する「国際知識経済都市会議」（第3回国際地域ベンチマーク会議）に加盟する都市。シアトルの提唱で始まったこの協議会（地域コンソーシアム）は、バルセロナ、ミュンヘン、ヘルシンキ、ストックホルム、ダブリン、メルボルン、バンクーバー、テジョン、そして福岡、の10都市圏から構成されていて、お互いの都市の「良いところ」を学びあう関係性をつくってきている。

アジア太平洋都市サミットも、学びあうことをずっと続けてきている。これまでは、特に加盟都市間で情報を交換してきたけれど、もっと視野を広げて、サミット会員都市以外の「よかとこ」情報を共有していくことも、大事だなと思うようになった。実際APCS通信に対する読者の皆さんの反応も良い。

ということで、APCS通信は、世界中の「よかとし・よかこと」を発掘し、これからも、じゃんじゃん発信していきたいと思っている。なので、応援よろしくです（たまに、へたって、発行が遅れたりしてますけれども。。。目指します！毎月発行！！）ペコリ。

コロッセオに似たエントランス

吹き抜けが気持ちよい、1階はカフェが何軒も

色んな募集のお知らせ

イベントもあるヨン おいでおいで

カフェの前、そのコンサートは突然始まった

リーフレットやおススメ図書なども10ヶ国語ぐらいで対応してる

中国街角スケッチ

万博に沸く上海 ①

(財)福岡アジア都市研究所 主任研究員 唐 寅

参加国は約200、国際機関も50に上る史上最大規模の上海万博が「Better City, Better Life」（より良い都市、より良い生活）をメインテーマに5月1日に開幕した。

日本でもマスコミの関心が高く、日経テレコムの記事検索結果によると、4月20日から5月10日までに上海万博を取り上げた記事は実に1,865件にも上っている。

途上国での初開催とあって、当初はいろいろな不協和音もあったが、現地では概ね万博開催を喜ぶムードが強い。現に、国内外からの旅行客が急増しているため、高級ホテルの宿泊料が倍に跳ね上がり、中級クラスのホテルも予約しづらい状況が続いている。

「都市」をテーマにした世界博覧会を迎えるために、ここ数年、上海の都市インフラ状況は急速に改善されてきた。交通渋滞を解消する対策として建設した地下鉄は総延長420キロで、ロンドンを抜き世界一となった。特に浦東空港と都心に近い虹橋空港を結ぶ地下鉄2号線が全線開通したことで、国際線から国内線への乗り継ぎも非常に楽になった。

また、上海の都市景観もこれを機に一新したのである。道路に面している建物はすべて塗り替えられ、老朽化した施設も補修された。緑化事業に注力し、色鮮やかな花卉が至る所に植えられ、半径500m以内に必ず緑地公園が設置されるようになった。都市が美しくなっただけでなく、子供や老人たちの遊び場も確実に増えてきた。

さらに、万博会場となった黄浦江両岸地区では、前世紀初頭に立てられた200近くもの製造工場が閉鎖・移転し、周辺に集まる労働者の老朽化した密集住宅も取り壊された。立ち退きに伴うトラブルもほとんど聞かれず、多額の補償金を手にして新居に引っ越した元住民たちは、今度は万博招待券をもらってまたここを訪れることになる。市政府はすでに上海の各家庭に（511万世帯、登録済）万博入場無料券一枚と200元（約3,000円）分の交通カードを配布しはじめている。上海に半年間以上住む外国人家庭も対象になる。

いま、中国では猛スピードで都市化が進んでいる。「中国都市発展報告」（中国市長協会、2010.5）によると、2009年末までに中国には655の市があり、都市化率は46.59%、都市部人口も6億2,186万人に達した。しかし、先進国の都市化率はすでに85%以上で、世界平均も50%を超えている。このまま行くと、2020年に中国人の50%が都市部に居住し、2050年には75%の人口が都市部に住むようになる。毎年1,000万人以上が新たに都市部に住むようになる計算であり、それに伴う様々な都市問題も噴出するのであろう。

上海万博の発案者（汪道涵、元上海市長）は1980年代当初、大阪万博など戦後日本の経験を手本に、都市の持続発展を牽引する原動力を万博の開催に託していた。その願いはやがて「都市」と「生活」に絞られ、「Better City, Better Life」の中国語訳も「城市、譲生活更美好」となり、「都市、さらなる素晴らしい生活」を謳っている。

史上最多の参加となる上海万博は、中国人が世界を見直す絶好の機会である。そこで出展する各国が毎日のように会場内で自国の宣伝を繰り広げている。九州・福岡も万博開催期間中にプロモーションが数回計画されているそうで、その成果に注目したい。

新装したバンド（外灘）、自動車は地下を走る

街角で見かけた旅行者向けのレンタル自転車

花いっぱいの静安寺付近

万博会場付近の公園緑地、上海城の跡地

淮海路で見かけた外装が一新した洋風建築物

INFORMATION

［インフォメーション］

●平成21年度都市セミナーの採録がホームページでお読みいただけます！

ぜひご活用ください。

http://www.urc.or.jp/event/21_kako/H21.html

●「URC資料室だより」創刊！

平成22年度より、「資料速報」は「URC資料室だより」へ生まれ変わりました！

2008（平成20）年11月のニューズレター「都市研」創刊と同時に、同誌の最終ページに移動して発行していた「URC資料室だより」は単独で、月刊でホームページ上に発行します。「今月のおすすめ」「マスコミで見るURCの今」「新着資料一覧＋プラス」をエクセルシートでご覧いただけます。

http://www.urc.or.jp/siryou/dayori.html

賛助会員制度

年会費（法人：一口10,000円、個人：一口5,000円、学生一口：2,000円）をお支払いいただくと、さまざまな特典が受けられる賛助会員制度があります。詳しくは、(財)福岡アジア都市研究所までお尋ねください。

TEL: 092-733-5686 FAX: 092-733-5680 E-mail: info@urc.or.jp

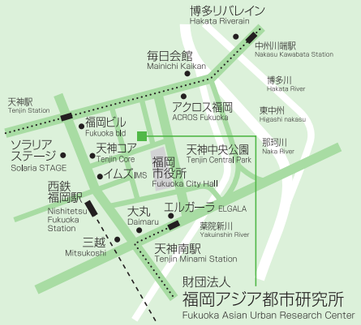
●特典
1. 研究所主催のセミナー等の開催情報をお知らせします。
2. 都市情報誌fU＋を毎号1部無料でお届けします。
3. 研究紀要を毎号1部無料でお届けします。

都市政策資料室

(財)福岡アジア都市研究所の都市政策資料室では、アジア地域を含む都市政策関係図書、各種調査・研究の成果報告書、行政資料などを幅広く収集・公開しております。また、アジア開発銀行の寄託図書室の指定を受けております。どなたでもご利用いただけます。皆様のご利用をお待ちしております。

開室：月～金10:00～17:00
（土曜日・日曜日・祝日・年末年始・毎月最終業務日・資料整理期間（不定期）は休み）

資料検索：研究所のホームページから資料室の図書・資料が検索できます。



バックナンバーのお知らせ

第1号
（2006年12月25日発行）
特集 博多駅
―現在・過去・未来―

第2号
（2007年3月30日発行）
特集 まち歩き
―まちの魅力再発見―

第3号
（2007年6月22日発行）
特集 地域の商店街
―賑わいのある商店街をめざして―

第4号
（2007年12月14日発行）
特集 国際交流・貢献
―国際化の取り組み―

第5号
（2008年7月31日発行）
特集 URC20周年

第6号
（2008年12月24日発行）
特集 まちかどイベント
―人・文化・集客―

第7号
（2009年6月26日発行）
特集 低炭素社会
―温暖化対策を越えて―

第8号
（2009年12月18日発行）
特集 路地
―そこに見る人の暮らし・都市の姿―

※当研究所のホームページからご覧いただけます。

編集後記

本誌初、都心部を離れた「特集 農村景観から」いかがでしたか。職場が天神なので、農村部に行く機会は少ないです。取材では、都心への通勤圏内に農村があると実感しました。農村の景観づくり、まちづくりに関わっていらっしゃる多数の方々にご協力いただき今号を発行することができました。深く感謝いたします。（瀧山）

以前農業関連の部署にいたので、今回の特集をお手伝いしていたら、いつの間にか今年度担当になっていました。今後よろしくお願いします。福岡市は意外と農業が盛んで、周辺部には農村風景が残っています。あまり知られてない、福岡市のもう一つの姿です。紙面の都合上、全部取り上げられず残念です。（田梅）

次号予告

第10号　2010年12月中旬発行予定

ご意見・ご感想募集中！

『都市情報誌fU+』に関する皆さまのご意見・ご感想をお寄せください。紙面づくりの参考にさせていただきます。今号およびこれまでの内容、あるいは今後取り上げて欲しい内容などを郵送・FAX・E-mailのいずれかの方法で下記宛先まで。その際はお送りくださる方のご住所・お名前をご明記ください。お礼として、10名の方に『都市情報誌fU+』第10号をお送りします。

都市情報誌fU＋（エフ・ユー プラス）第9号
2010年6月25日発行

■発行所
財団法人福岡アジア都市研究所
〒810-0001 福岡市中央区天神1-10-1
福岡市役所北別館6F
TEL: 092-733-5686
FAX: 092-733-5680
E-mail:info@urc.or.jp
URL:http://www.urc.or.jp

■編集責任者：原　重実
■編集スタッフ：瀧山 直子　田梅 朋子
■デザイン・印刷：九州チューエツ株式会社